

世親作『釈軌論』第5章翻訳研究(2)

上野牧生・堀内俊郎

はじめに

本稿は、世親(Vasubandhu)の『釈軌論』(*Vyākhyāyukti*)、および徳慧(Guṇamati)の『釈軌論注』(*Vyākhyāyuktiṭīkā*, 徳慧注)第5章の翻訳研究であり、同名拙論の続編である。『釈軌論』は全5章から構成されるが、前稿の序文にて述べたとおり、第5章は、経典解釈を主題とする前四章と大きく異なり、佛陀のことばを「どのように聴くべきか」という一点に焦点が当てられる。そうした第5章を貫く主題は、佛陀のことばを「敬って聴くこと」(*śuśrūṣā*)、すなわち「敬聴」である。この術語は世親自身が引用する『広義法門経』(*Arthavistara*)に由来するが、世親によれば、敬意をもって佛陀のことばに耳を傾けることが佛教の学修を開始する上で重要な契機となるという。そして、第5章では説法者(dharmakathika⁽¹⁾)の視点から、佛陀の教えを伝える者は、聴き手を「教えの器たるもの」(*deśanābhājanatva*)⁽²⁾とするため、聴き手に「敬聴」というあり方を促すべきだとする。特に、本稿が対象とする§5.2.6～§5.2.18は§5.2「目的を明示すること」の一部であるが、この§5.2は、説法者が聴き手に「敬聴」の目的を明示する、すなわち何のために敬聴すべきであることを明示することが主題である。そうした第5章の内容は、別の観点から見れば、世親が説法者(の予備軍)⁽³⁾に向けて作成した法話例集とみなすこともできよう。というのも、§5.2は約40ほどの小節からなり、それらの小節は何れも「それゆえ、敬意をもって佛説(ノ法)を聴くべきである」といった類いの締結文で締め括られている点で共通する。また、各小節は、様々な譬喩を用いて敬聴の利点や徳性を簡潔に説明する内容である。これはつまり、説法者が各小節の内容を取捨選択し、実

際にそれぞれの説法の場面において法話として語り得るための工夫であると言えよう。

5 『釈軌論』第5章 翻訳（続き）

5.2 目的を明示すること（続き）

5.2.6 佛説は善説である (VyY, D shi 118a3-120a4, P si 137a8-139b6)⁽⁴⁾

【問い】さらに、なぜ〔敬意をもって聴くべきであるの〕か？

【答え】なぜなら、世尊の法と律は善く説かれたからである。

【問い】では、どのように善く説かれたのか？

【答え】10のあり方によって。(i) 正統な由来性によって、(ii) 主題性によって、(iii) 継続性によって、(iv) 明示性によって、(v) 分析性によって、(vi) 基礎性によって、(vii) 納得性によって、(viii) 仮設性によって、(ix) 時宜性によって、(x) 徳の保持性によって。

【問い】どのように (i) 正統な由来性によるのか？

【答え】正しく現等覚された上で、説かれたからである。

【問い】どのように (ii) 主題性によるのか？

【答え】あらゆる衆生を主題（対象）として、説かれたからである。

【問い】どのように (iii) 継続性によるのか？

【答え】ある時〔のみ〕ではなく、繰り返し繰り返し、持続的に説かれたからである。

【問い】どのように (iv) 明示性によるのか？

【答え】師拳によっていかなる妨害もせず、妨害なく正しく説かれたからである。

【問い】どのように (v) 分析性によるのか？

【答え】衆生の願い（*sattvāśaya）のとおり、正しく説かれたからである。

【問い】どのように (vi) 基礎性によるのか？

【答え】5つの要件をそなえた御声⁽⁵⁾でもって、正しく説かれたからである。

【問い】どのように (vii) 納得性によるのか？

【答え】一音（*ekasvara）でもって、限りなき世界を納得させ、正しく説かれ

たからである。⁽⁶⁾そして、あらん限りの聴衆の輪に、すみずみに至るまで納得させ、正しく説かれたからである。

【問い】どのように(viii) 仮設性(**prajñaptitva*)によるのか？

【答え】ふたつの極端を離れた道を、説かれたからである。

【問い】どのように(ix) 時宜性によるのか？

【答え】「ちょうど」成熟した教化対象者たちに、説かれたからである。

【問い】どのように(x) 徳の保持性によるのか？

【答え】60のあり方という徳をそなえたおことばを、正しく説かれたからである。次のとおり、大乘經典『如來秘密〔經〕』(**Tathāgataḡhyaka*)⁽⁷⁾では、

シャーンタマティよ、さらにまた、如來のおことばは、60のあり方をそなえたものとして発せられる(*punar aparaṃ śāntamate tathāgatasya śaṣṭyākāropeṭā vāḡ nīscarati*)⁽⁸⁾。(1) 湿潤な、(2) 柔軟な、(3) 意に適う、(4) 意を楽しませる、(5) 清浄な、(6) 無垢な、(7) 鮮明な、(8) 快く響く、(9) 聴くに値する、(10) 無傷な、(11) 快適な、(12) 調伏されている、(13) 粗硬でない、(14) 粗暴でない、(15) 善く調伏されている、(16) 耳に快い、(17) 身体を爽快にする、(18) 心をよこぼせる、(19) 心を満足させる、(20) 喜と樂を生じさせる、(21) 悩むことのない、(22) 周知されるべき、(23) 識別されるべき、(24) 明瞭な、(25) 愛すべき、(26) 喜ぶべき、(27) 周知させるべき、(28) 識別させるべき、(29) 道理をそなえた、(30) 連関した、(31) 重複して説くという過失を離れた、(32) 獅子の咆哮〔の如き〕、(33) 象の鳴声〔の如き〕、(34) 雷鳴の轟き〔の如き〕、(35) 龍王の〔声の〕音〔の如き〕、(36) 緊那羅の合唱の声色〔の如き〕、(37) 迦陵頻伽の声の音の響き〔の如き〕、(38) 梵天の声の音の響き〔の如き〕、(39) 共命鳥の声の音の響き〔の如き〕、(40) 天王の穏和な声色の如き、(41) 天鼓の音〔の如き〕、(42) 高慢でない、(43) 卑屈でない、(44) あらゆることばに入り込む、(45) 俗悪なことばを離れる、(46) 欠点のない、(47) 執著の

ない、(48) 怖れのない、(49) 歡喜した、(50) 遍満した、(51) 万全な、
(52) 流暢な、(53) 融通な、(54) あらゆる声を満たす、(55) 衆生の
根を喜ばせる、(56) 批難のない、(57) 増えも減りもしない、(58) 動
じない、(59) あらゆる集会に伝わる、(60) あらゆる種類の最高のもの
をそなえた〔声〕をそなえ〔たものとして、であ〕⁽⁹⁾る。

德慧注 (VyT, D si 284a5-b4, P i 171b1-172a2)

『釈軌論注』。第 14 卷。

さらにと詳細に出ている中で、さらにとは、別の解釈によっても、敬意をも
って法を聴くべきである。

なぜか。なぜなら、世尊の法と律は善く説かれたからである。

(iv) 師拳によっていかなる妨害もせずとは、師拳によっていかなる法と律を
妨害もせずという意味である。

【問い】どのように (vi) 基礎性によるのか？

【答え】5 つの要件をそなえた御声でもって、正しく説かれたからである。な
ぜなら、5 つの要件をそなえた御声とは、名と句と文の総体〔としての〕おこ
とばであり、それが基礎だからである。以上のとおりであれば、基礎である点
で、世尊の法と律は善く説かれたのである。

【問い】どのように (vii) 納得性によるのか？

【答え】一音でもって、限りなき世界を納得させ、正しく説かれたからである。
なぜなら、一音でもって、限りなき世界を納得させること、それを正しく説か
れたからである。

さらに別〔の解釈〕では、あらん限りの聴衆の輪に、すみずみに至るまで納
得させ、正しく説かれたからである。なぜなら、あらん限りの聴衆の輪に、す
みずみに至るまで納得させること、それを正しく説かれたからである。以上の
とおりであれば、納得させる点で、すなわち了解させる点で、世尊の法と律は
善く説かれたのである。

【問い】どのように (viii) 仮設性によるのか？

【答え】ふたつの極端を離れた道を、説かれたからである。なぜなら、常住と断滅などの極端を離れた、聖者の道を説かれたからである。以上のとおりであれば、仮設されたものである点で (gdags pa nyid kyis)、世尊の法と律は善く説かれたのである。

5.2.6 (続き) 如来の 60 種音声 (1) - (20)⁽¹⁰⁾

その中で、(1) 湿潤⁽¹¹⁾などは、衆生の要素である善根を養育するからである (tatra snigdhā sattvadhātukuśalamūlopasthaṃbhikatvāt)。

(2) 柔軟⁽¹²⁾などは、他ならぬ現世において触れるとき心地よいからである (mrdukā dṛṣṭa eva dharme sukhasaṃsparśatvāt)。

(3) 意に適うとは、〔ことばの〕意味が善いからである (manojñā svarthatvāt)。⁽¹³⁾

(4) 意を楽しませるとは、〔ことばの〕表現が善いからである (manoramā suvyañjanatvāt)。

(5) 清浄⁽¹⁴⁾などは、この上なき(無上の)出世間の後に得られるからである (śuddhā niruttaralokottaraprāṣṭhalabhatvāt)。

(6) 無垢⁽¹⁵⁾などは、あらゆる煩惱の随眠と習気に結びつかないからである (vimalā sarvakleśānuśayavāsanāvisamṃyuktatvāt)。

(7) 鮮明⁽¹⁶⁾などは、単語と表現がよく知られているからである (prabhāsvārā pratīpadavyaṇjanatvāt)。

(8) 快く響くとは、あらゆる外道たちの愚慧である見解を打ち砕く力という徳をそなえるからである (valguḥ sarvatīrthyakumatidrṣṭivighātabalaguṇayuktatvāt)。

(9) 聴くに値するとは、正行によって出離するからである (śravaṇīyā pratipattinairyaṇikatvāt)。

(10) 無傷⁽¹⁷⁾などは、いかなる他者の中傷をもってして〔も〕壊されることがないからである (anēla sarvaparapravādidbhir anācchedyatvāt)。

(11) 快適⁽¹⁸⁾などは、喜びをもたらすからである (kalā rañjikatvāt)。

第九卷。

- (12) 調伏されているとは、貪の対治だからである (vinīta⁽¹⁶⁾ rāgapratipakṣatvāt)。
- (13) 粗硬でないとは、〔戒〕学の設定が容易な手段だからである (akarkaśā⁽¹⁷⁾ śikṣāprajñaptisukhopāyāt)。
- (14) 粗暴でないとは、それ(戒学)を逸脱した際に正しい出離の手段を教示するからである (aparūṣā tadvyatikrame samyagñiḥsaraṇopāyopadeśakatvāt)。⁽¹⁸⁾
- (15) 善く調伏されているとは、三乗による調伏を教示するからである (suvīnītā yānatrayavinayopadeśikatvāt)。
- (16) 耳に快いとは、〔心の〕散乱に対する対治だからである (kaṇhasukhā vikṣepapratipakṣatvāt)。
- (17) 身体を爽快にするとは、三昧に誘引するからである (kāyaprahlādanakārī samādhyāvāhakatvāt)。⁽¹⁹⁾
- (18) 心をよろこばせるとは、観による喜悦に誘引するからである (cittaudevilyakārī vipaśyanāprāmodyāvāhakatvāt)。⁽²⁰⁾
- (19) 心を満足させるとは、疑いを断ち切るからである (hrdayasantuṣṭikārī saṃśayacchedikatvāt)。
- (20) 喜と楽を生じさせるとは、誤った確信を取り除くからである (prītisukhasaṃjananī mithyāniścayāpakaṣikatvāt)。⁽²¹⁾

德慧注 (VyYṬ, D si 284b4-285a1, P i 172a2-8)

- (1) 善根を養育するからとは、無貪 (*alobha) などという善根を堅固にする、すなわち生長の原因であるから、という意味である。
- (5) 〔清浄などは、〕この上なき(無上の)出世間の後に得られるからとは、出世間は2種ある。無上 (*niruttara) と有上 (*sottara) である。その中で、およそ無上〔なる出世間〕の後に〔その清浄が〕得られるから、という意味である。⁽²²⁾
- (8) 力という徳をそなえるから、語源解釈の方法によって快い響き (*valgu)⁽²³⁾である。

(9) 正行によって出離するからとは、〔経に〕説かれたとおりのこと、それを〔正しく〕行ずることによって出離する。解脱を獲得させる、という意味である。

(13) 〔戒〕学の設定が容易な手段だからとは、出家者と在家者の諸学〔処〕に関して容易であるから、粗硬でないである。

(14) 粗暴でないとは、それを逸脱した際に正しい出離の手段を教示するからである。なぜなら、その〔戒〕学を逸脱してしまって〔も〕、懺悔（*pratidesanā）などの正しい出離の手段を教示するからである⁽²⁴⁾。

5.2.6 (続き) 如来の 60 種音声 (21) – (40)

(21) 悩むことの無いとは、正行には後悔がないからである (niḥparidāhā pratipattāv avipratisāratvāt)。

(22) 周知されるべきとは、聞所成慧の完備の拠り所だからである⁽²⁶⁾ (ājñeyā saṃpannaśrutamayajñānāśrayatvāt)。

(23) 識別されるべきとは、思所成慧の完備の拠り所だからである (vijñeyā saṃpannacintāmayajñānāśrayatvāt)。

(24) 明瞭なとは、師拳なく法が説かれるからである (viśpaṣṭā 'nācāryamuṣṭidharmavihitavāt)。

(25) 愛すべきとは、自利を得た者たちが〔その音声を〕愛するからである (premaṇīyā 'nuprāptasvakārhānām premakaravāt)。

(26) 喜ぶべきとは、自利を未だ得ていない者たちが切望するからである (abhinandanīyā 'nanuprāptasvakārhānām sprhaṇīyavāt)。

(27) 周知させるべきとは、思議を超えた法を正しく教示するからである (ājñāpanīyā 'cintyadharmasamyagdeśikatvāt)。

(28) 識別させるべきとは、思議を超えた法を正しく教示するからである⁽²⁷⁾ (vijñāpanīyā 'cintyadharmasamyagdeśikatvāt)。

(29) 道理をそなえたとは、正しい認識手段と矛盾しないからである⁽²⁸⁾ (yuktā pramāṇāvīruddhatvāt)。

(30) 連関したとは、教化対象者に相応しいように教示するからである⁽²⁹⁾ (sahitā

yathārhavineyadeśikatvāt)。

(31) 重複して説くという過失を離れたとは、⁽³⁰⁾ 実を結ばないことがないからである (punaruktadoṣajahā 'vandhyatvāt)。

(32) 獅子の咆哮〔の如き〕とは、あらゆる外道の集団を恐怖させるからである (siṃhasvaravegā sarvatīrthyasaṃghatrāsakatvāt)。

(33) 象の鳴声〔の如き〕とは、⁽³¹⁾ 広大だからである (nāgasvaraśabdodāratvāt)。

(34) 雷鳴の轟き〔の如き〕とは、深遠だからである (meghasvaraghoṣā gaṃbhīratvāt)。

(35) 龍王の〔声の〕音〔の如き〕とは、受け取る価値があるからである (nāgendarutādeyatvāt)。

(36) 緊那羅⁽³²⁾の合唱の声色〔の如き〕とは、甘美だからである (kinnarasāṅgītighoṣā madhuratvāt)。

(37) 迦陵頻伽の声の音の響き〔の如き〕とは、⁽³³⁾ 間断なく、かつ、変化に富むからである (kalaviṅkasvararutaravitā 'bhīkṣṇabhaṅguratvāt)。

(38) 梵天の声の音の響き〔の如き〕とは、遠方にまで響き渡るからである (brahmasvararutaravitā dūraṃgamatvāt)。

(39) 共命鳥の声の音の響き〔の如き〕とは、⁽³⁴⁾ あらゆる成就に⁽³⁵⁾ 先行する吉兆だからである (jīvaṃjīvakasvararutaravitā sarvasiddhipūrvamgamamaṅgalatvāt)。

(40) 天王の穏和な声色の如きとは、犯すべからざるものだからである (devendramadhurānirghoṣā 'natikramaṇīyatvāt)。

徳慧注 (VyYṭ, D si 285a1-b1, P i 172a8-173a3)

(21) 悩むことの無いとは、正行には後悔がないからである。なぜなら、それを目的として実践する加行には後悔がないのである。

(22) 周知されるべきとは、理解されるべきという意味である。なぜか。聞所成慧の完備の拠り所だからである。なぜなら、聞所成慧は顛倒のない〔聞の〕内容の完備を拠り所とするものだからである。

(25) 自利を得た者たちとは阿羅漢たちである。

(27) 周知させるべきとは、これによって周知させられる (*anenājñāpanīya) というわけで「教勅」(*ājñāpanīya) である。どのようにか。思議を超えた法を正しく教示するからである。なぜなら、聞所成〔慧〕によって思議を超えた法を正しく教示するからである。

また、それらの思議を超えた法は、次のとおり、世尊によって「比丘たちよ、思議を超えたこれら4つの主題 (*sthāna) は、心を醗酲させることにもなろうし、昏迷させることにもなろう。4つとは何か。自己に対する思惟、有情たちの業と成熟に対する思惟、世界に対する思惟、諸佛の佛陀の対象領域である」。

第2の経節では、これら4つに関して、「有情たちの業と成熟、静慮者たちの対象領域、神通をそなえた者たちの神通の対象領域」と説かれている。

(28) 識別させるべきとは、これによって識別させられる (*anena vijñāpanīya) というわけで「令解」(*vijñāpanīya) である。どのようにか。思議を超えた法を正しく教示するからである。なぜなら、思所成〔慧〕によって思議を超えた法⁽³⁹⁾を正しく教示するからである。

(31) 実を結ばないことがないからとは、果報を伴うからという意味である。

(37) 迦陵頻伽の声の音の響き〔の如き〕とは、間断なく、かつ、変化に富むからである。迦陵頻伽は鳥である。その吼声は常に、間断なく、かつ、変化に富むからである。〔耳に〕快いからという意味である。

(39) あらゆる成就に先行する吉兆だからである。なぜなら、共命鳥の声があらゆる成就に対して吉兆となるのに似て、〔佛説は〕あらゆる成就に先行するものであるから吉兆なのである。

5.2.6 (続き) 如来の60種音声 (41)-(60)

(41) 天鼓の音〔の如く〕とは、あらゆる悪魔と反対者を征服することに先立たれているものだからである (duṇḍubhisvarā sarvamārapratyarthikavijayapūrvāṅgamatvāt)。⁽⁴⁰⁾

(42) 高慢でないとは、称讃されても〔それに〕染まらないからである (anunnatā stutyasaṃkliṣṭatvāt)。

(43) 卑屈でないとは、非難されても〔それに〕染まらないからである

(anavanatā nindāsaṃkṣiptatvāt)。

(44) あらゆることばに入り込むとは、あらゆる文法学の、あらゆる相の種類に入り込むからである (sarvaśabdānupraviṣṭā sarvavyākaraṇasaṃvākārakakṣaṇānupraviṣṭatvāt)。

(45) 俗悪なことばを離れるとは、記憶が忘失したときも、それ (俗悪なことば) を口にすることはないからである (apaśabdavigatā smṛtisampramoṣe tadaniścaraṇatvāt)。

(46) 欠点のないとは、教化対象者のためになすべきことを、常に補助するからである (avikalā vineyakṛtyasaṃvākālapratyupasthitatvāt)。

(47) 執著のないとは、利得と恭敬に依拠しないからである (alīnā lābhasatkārānīśritatvāt)。

(48) 怖れのないとは、非難されるべきことを離れるからである (adīnā sāvadyāpagatatvāt)。

(49) 歓喜したとは、倦み疲れることがないからである (pramuditā 'kṛḥḥitvāt)。

(50) 遍満したとは、あらゆる学術分野 (五明処) に対する巧みさを身につけるからである (prasṛtā sarvavidyāsthānakaṣṭhāyānugatatvāt)。

(51) 万全なとは、衆生たちに、彼らのあらゆる利益を成就させるからである (sakhilā sattvānāṃ tatsakalārthasaṃpādakatvāt)。

(52) 流暢なとは、流れが断えないからである (saritā prabandhānupacchinnavāt)。

(53) 融通なとは、多様な〔単語と表現の〕種類が現前するからである (lalitā vicitrākārapratyupasthānatvāt)。

(54) あらゆる声を満すとは、ひとつの声から複数のことばの表象を現前させるからである (sarvasvarapūraṇy ekasvaranaikaśabdavijñaptipratyupasthāpanatvāt)。

(55) 衆生の根を喜ばせるとは、ひとつ〔の声〕から複数の意味の表象が現前するからである (sarvasattvendriyasantoṣaṇy ekānekārthavijñaptipratyupasthānatvāt)。

(56) 批難のないとは、主張のとおりだからである (aninditā yathāpratijñatvāt)。

(57) 増えも減りもしないとは、〔声が〕到来した時に実践するからである (acāñcalāgamitakālaprayuktatvāt)。

(58) 動じないとは、急いで説くことがないからである (acapalā 'tvaramāṇavहितatvāt)。

(59) あらゆる集会に伝わるとは、近い〔集会〕と遠い集会において等しく聞かれるからである (sarvapaṣadanuravitā dūrāntikaparṣattulyaśravaṇatvāt)。

(60) あらゆる種類の最高のものをそなえた〔声〕とは、世間的な事柄を、すべて、譬喩の属性 (dharma) に変えるからである (sarvākāravaropetā sarvalaukikārthadrṣṭāntadharmapariṇāmikatvāt)。⁽⁴⁸⁾

徳慧注 (VyYT, D si 285b1-286a4, P i 173a3-b8)

(41) 天鼓の音〔の如く〕とは、あらゆる悪魔と反対者を征服することに先立たれているものだからである。なぜなら、あらゆる悪魔と、あらゆる反対者を征服することに先立たれているものであるから、それゆえ天鼓の音〔の如く〕である。

(44) あらゆることばに入り込むとは、あらゆる文法学の、あらゆる相の種類に入り込むからである。なぜなら、『インドラが作った〔著作〕』などのあらゆる文法学の、あらゆる相の種類に入り込む。それ (あらゆることばに入り込む) の相を有している。それゆえ、あらゆる相に入り込むのである。⁽⁴⁹⁾

(45) 俗悪なことばを離れるとは、記憶が忘失したときも、それを口にするとはしないからである。なぜなら、記憶の忘失によってその俗悪なことばを口にするとはしないからである。

(46) 欠点のないとは、教化対象者のためになすべきことを、常に補助するからである。なぜなら、教化対象者のためになすべきこと、すなわち、諫言する (*codanā), 記憶させる (*smaraṇa), 教誡する (*anusāsana), 教授された法を説く (*avavādadharmadeśanā) などのなすべきことを、常に補助する。あたかも『声聞地』に詳しく説かれているとおりである。⁽⁵⁰⁾

(48) 〔怖れのないとは、〕非難されるべきことを離れるからであるとは、怖れを離れるからという意味である。⁽⁵²⁾

(51) 万全なとは、衆生たちに、彼らのあらゆる利益を成就させるからである。なぜなら、それによって、衆生たちのあらゆる (*sakala) 利益を成就させるからである。それゆえ、語源解釈によって「万全」(*sakhila) なのである。⁽⁵⁴⁾

(53) 融通などは、多様な種類が現前するからである。なぜなら、多様な単語と表現 (*padavyañjana) の種類が現前するからである。

(54) あらゆる声を満たすとは、ひとつの声から複数のことばの表象を現前させるからである。なぜなら、ひとつの種類〔の声〕によって複数のことば (*śabda) の表象が現前するからである。

(55) 衆生の根を喜ばせるとは、ひとつ〔の声〕から複数の意味の表象が現前するからである。なぜなら、ひとつ〔の声〕から、複数の意味の表象が現前するからである。

(56) 批難のないとは、主張のとおりだからである。なぜなら、説かれたとおりのこと、それは、まったくそのとおりに無常などである。さらに、説かれたところの功德、それはまた、説かれただけではなく、まったくそのとおりに成就するからである。

(60) あらゆる種類の最高のものをそなえた〔声〕とは、世間的な事柄を、すべて、譬喩の属性に変えるからである。なぜなら、世間的な事柄を、すべて、譬喩の属性に変える、すなわち、『如来生起所説経』では、大海〔という譬喩〕でもって世尊を称讃するように。⁽⁵⁵⁾それゆえ、その、あらゆる種類と、最高の法を離れていないから「あらゆる種類の最高のものをそなえた〔声〕」である。

以上のとおり、(x)〔60の〕徳を保持するものである点で、それを説くあり方によって、⁽⁵⁶⁾世尊の法と律は善く説かれた (*subhāṣita) のである。

5.2.7 法をそなえた法輪 (VyY, D shi 120a4-b4, P si 139b6-140a7)

【問い】さらに、なぜ〔敬意をもって聴くべきであるの〕か？

【答え】正しく組み合わせられた車輪も、推進する人と、地面と、〔その〕両者の徳によって回転する。すなわち、もし、推進する人も正しく推進し、進みゆかれるべき地面もでこぼこがないならば。

同じように、如来によって正しく説かれた法輪も、教示者と、聴衆と、〔その〕両者の徳によって回転する。すなわち、もし、教示者が正しく教示し、説

示されるべき聴衆が正しく聴くならば。

だからこそ、世尊にとって、2人の人が如来の法をそなえた法輪を引き続き
転ずる者である。〔2人の人とは、〕敬意をもって法を説く人と、それを敬意を
もって聴く人である。

【問い】「法をそなえた法輪」(*dhārmika-dharmacakra)⁽⁵⁷⁾というこれは何か？

【答え】勝義の法と離れていないのが「法をそなえた」であり、世俗の法の本
性を教示することを自性とする輪が「法輪」である。⁽⁵⁸⁾

さらに別〔の解釈〕では、⑦「教え」(*pravacana)も「法」と呼ばれる。次
のとおり

どのように、比丘は、法（教え）を知るものであるのか。この世で比丘
が法（教え）を知る、すなわち契経や応頌や (*iha bhikṣur dharmam jānāti
tadyathā sūtram geyam)⁽⁵⁹⁾

と詳細に説かれているように。⑪「理」(*naya)⁽⁶⁰⁾も〔「法」と呼ばれる〕。次の
とおり

法（理）を以て衣を求めるのであり、法に非ざるもの（理に非ざるもの）
を以て〔衣を求めるの〕ではない (*dharmaṇa cīvaram paryeṣate nādharmena)⁽⁶²⁾

と出ているように。⁽⁶³⁾それゆえ、「理」である法と離れていない「教え」が「法
輪」と〔呼ばれる〕。⁽⁶⁴⁾

〔世間一般における〕車輪との共通性によって「輪」なのである。教化対象
者である他者たちの相続に転じてゆくからである。⁽⁶⁵⁾一方、外教徒たちにも法輪
はあるのだが、法をそなえていない。理である法と離れているからである。そ
れゆえ、如来の法輪のみが法をそなえたものであると確定されるべきである。

以上のとおり、「いかにして佛・世尊の〔転じられた〕法輪を引き続き転じ
ようか」と考えて、敬意をもって法を聴くべきである。⁽⁶⁶⁾⁽⁶⁷⁾

徳慧注 (VyYṭ, D si 286a4-6, P 173b8-174a4)

さらにと詳細に説かれているのは、さらに、なぜ敬意をもって法を聴くべきであるのか？

【答え】なぜなら、正しく組み合わされた車輪もと詳細に説かれているからである。

勝義の法と離れていないのが「法をそなえた」でありとは、勝義の法の生起に資するのが「法をそなえた」である。「理」も「法」である。次のとおりと詳細に説かれている。

それゆえ、「理」である法と離れていないのが「法をそなえた」である。

〔世間一般における〕車輪との共通性によって「輪」なのである。その共通性とは何か。他の地に向けて回転することである。

〔一方、外教徒たちにも法輪はあるのだが、〕法をそなえていない。理である法と離れているからである。彼ら（外教徒たち）による解脱の手段（*mokṣopāya）の説明、それは、プラクリティや、プルシャや、内知などを説くものである。〔それらは〕理と離れている。

5.2.8 3つの時点における3つの利点 (VyY, D shi 120b4-121a1, P si 140a8-b6)

【問い】聖者シャーリプトラは、

以上のように、聖者である声聞が法を正しく聴くとき、(1) 解説者を害することなく、(2) 話の核心を理解し、(3) 法爾として教主に供養し、
(4) 自己の目的を得、(5) 涅槃をも得る⁽⁶⁸⁾

と〔『広義法門経』にて〕仰っている。これによって、何が示されているのか？

【答え】法を正しく聴くとき⁽⁶⁹⁾には、3つの時点において、3つの利点があると示されている。

(i) 聴くときには、解説者の意向（*āśaya）を満足させ（完成させ）、〔聴聞者〕自身も法の意味の核心を得ることで、自他〔の双方〕を利益する（救済する）。

((1)(2))

(ii) 実践するときには、教主の趣意(*abhiprāya)を満足させ、〔聴聞者〕自身も漏盡を得ることで、自他〔の双方〕を利益する。((3)(4))

(iii) 最後のときには、一切の苦の終焉、〔すなわち〕無余依涅槃を得る。((5))

【問い】もし仮に、3つの時点において〔3つの利点があるの〕であれば、なぜ「聴くとき」(*śṛṇvan)と〔『広義法門経』に〕説かれたのか？

【答え】〔解説者が法を〕語りながら理解させるという2つの行為が同一時点のものとして意図されているように、そのように〔聴聞者が〕聴くときには、説かれたとおりに実践するわけではない。⁽⁷⁰⁾けれども、聴くという原因こそが趣意⁽⁷¹⁾されている。例えば「酥油（ギー）を食べたときには、太る」⁽⁷²⁾というように。

以上のとおり、5つの利点を望む者は、敬意をもって法を聴くべきである。

徳慧注 (VyYT, D si 286a6-b1, P i 174a4-7)

〔聖者シャーリプトラは、〕以上のようにとは、次のとおり〔『広義法門経』に〕「(i)〔適〕時に〔法を聴くべきであり〕、(ii)尊敬して」⁽⁷³⁾と詳細に説かれているように。

聴くときには……⁽⁷⁴⁾自他〔の双方〕を利益する。どのようにか。解説者の意向と詳細に出ている。

2つの行為が同一時点のものとして意図されている。話すという行為と、理解〔させる〕という行為が、である。

例えば「酥油（ギー）を食べたときには、太る」⁽⁷⁵⁾という〔喩え〕も、まさに食べたときに太るわけではないと意図されている。それではどうなのか。酥油（ギー）を食べたことが原因で太るという意図である。

5.2.9 盲人 (VyY, D shi 121a1-2, P si 140b6-7)

盲人や、目を閉じた者にとって、燃える灯〔が光源としては無意味である〕に等しいように、能力がなく誤った見解をもつ者や、耳を傾けない者⁽⁷⁵⁾もそう（盲人と同じ）⁽⁷⁶⁾なのであるから、それゆえ「盲人と同じであるとすれば、適切

でない」と考えて、敬意をもって法を聴くべきである。

徳慧注 (VyYṭ, D si 286b1-2, P i 174a7-8)

能力がなく誤った見解をもつ者や、耳を傾けない者も、説法に対して敬意をもって聴くことがなければ、〔盲人と〕同じである。

それゆえ「盲人と」と詳細に出ている。

5.2.10 牛飼いナンダのアヴァダーナと信 (VyY, D shi 121a2-5, P si 140b7-141a4)⁽⁷⁷⁾

理解の及ばない者 (*agamaka) も、佛説 (*buddhavacana) を敬意をもって聴くべきである。なぜなら、信 (*śraddhā) のみをもって〔佛説を〕聴く〔だけ〕でも、広大な福德をもつ〔者となり〕、智慧の要素⁽⁷⁸⁾を養うのであるから、ましてや〔法の〕意味を証得する〔ことになれば〕、なおさらである。〔説法者は、〕牛飼いのナンダ (*Nanda) がカエルを棒で押し潰したというアヴァダーナをも語るべきである。⁽⁸⁰⁾これについてさらに説明する。

信をもって聴聞する者は、天界 (*svarga) 〔で〕喜ぶ〔原因となる〕福德⁽⁸¹⁾があり、涅槃を得る〔原因となる〕智慧の種子が養われる。

受け取る側が器を保持するのは易しいが、注ぐ側が延命薬 (*rasāyana) を注ぐのは難しい。ゆえに、あなた方は、心を向けることで、耳という器の保持のみをすべきであり、我々は正法という延命薬を注ごう。あなた方の義務は〔なし〕易く、我々の義務は〔なし〕難しい。

理に適う容易なことをなさないのは非難に値する。それゆえ、敬意をもって法を聴くべきである。

(徳慧注なし)

5.2.11 水 (VyY, D shi 121a5-b2, P si 141a4-8)⁽⁸²⁾

この佛説は水と似ている。水は5種の利益をもたらす。

- (1) 湿らせるべき粥 (*taṇḍula) などを湿らせ,
- (2) 身体・衣服・器の汚れを取り除き,
- (3) 夏期の体の熱 (*paridāha)⁽⁸³⁾を取り除き,
- (4) 激しい〔喉の〕渇き (*pipāsa) を鎮め,
- (5) 草類 (*yavasa)・穀類 (*phala)・森林 (*vana) を生長させ、大きくする。

同様に、佛説〔という水も〕,

- (1) 信を生じさせることによって、教化対象者の相続を湿らせ、⁽⁸⁴⁾
 - (2) 破戒という汚れを取り除き,
 - (3) 欲という熱を取り除き,
 - (4) 〔輪廻の生存を〕再び生み出す(再有の)渇愛を鎮め、⁽⁸⁵⁾
 - (5) 菩提分〔法〕に適した徳という草類・穀類・森林を生長させ、大きくする。
- また、その5種の利益は、信の獲得((1))と、作業を含む三学((2)(3)(4)(5))に関するものであると理解すべきである。

それゆえ、その5種の利益を望む者は、敬意をもって佛説を聴くべきである。

徳慧注 (VyYT, D si 286b2-7; P i 174a8-175a1)

また、その5種の利益は、信の獲得と、作業を含む三学に関するものであると理解すべきであるとは、信の獲得に関するものであると理解すべきであり、作業を含む三学に関するものであると理解すべきである、という意味である。

どのようにか。その中で、信の獲得に関して、佛説〔という水も、〕(1) 信を生じさせることによって、教化対象者の相続を湿らせは、第1の利益として理解すべきである。⁽⁸⁷⁾

作業を含む学〔のうち〕第1の増上戒学に関して、(2) 破戒という汚れを取り除きは、第2の利益として理解すべきである。増上戒学の作業は破戒という汚れを取り除くことである。

作業を含む学〔のうち〕第2の増上心学に関して、(3) 欲という熱を取り除

きは、第3の利益として理解すべきである。増上心学の作業は、欲という熱を取り除くことである。失わせるのである。

作業を含む学〔のうち〕第3の増上慧学に関して、(4)〔輪廻の生存を〕再び生み出す(再有の)渴愛を鎮めと、(5)菩提分〔法〕に適したと詳細に出ているのは、第4と、第5の2つの利益として理解すべきである。その増上慧学の作業は、再び生み出す(再有の)渴愛を鎮め、菩提分〔法〕に適した諸徳を生長させ、大きくするという作業を有するのである。

生長させとは、それら(諸徳)を発生させることである。

大きくするとは、生長した〔それ〕ら(諸徳)を拡大させることである。

5.2.12 火 (VyY, D shi 121b2-4, P si 141a8-b3)⁽⁸⁸⁾

火は4つのはたらきをする。すなわち、

- (1) 焼く、
- (2) 煮る、
- (3) あたためる、
- (4) 照らす。

同様に、佛説という火も、

- (1) 相続が熟成した者たちの諸煩惱を焼き、
- (2) 相続が熟成していない者たちの諸善根を熟成させ (=煮て)、
- (3) 生存を喜ぶ者たちを〔生存から〕厭離させるために悩まし (=あたため)、
- (4) 既に厭離した者たち、疑念を抱く〔道に入った〕者たち、悪しき道に入った者たちに、道と非道を正しく教示するため、照らすのである。

それゆえ、敬意をもって法を聴くべきである。

徳慧注 (VyYT, D si 286b7-287a2, P i 175a1-2)

(4) 既に厭離した者たち、疑念を抱く者たち、悪しき道に入った者たちに、道と非道を正しく教示するため、照らすのであるとは、〔佛説の〕過失に対する疑念を抱く道に入った者たちや、悪道に入った者たちに正しく教示するため、

という意味である。

5.2.13 安全な岸辺 (VyY, D shi 121b4-7, P si 141b3-7)⁽⁸⁹⁾

5つの理由によって、安全な岸辺⁽⁹⁰⁾に依拠すべきである。

- (1) 垢を落とすため、
- (2) 熱病を鎮めるため、
- (3) 渴きを鎮めるため、
- (4) 楽しい遊びを経験するため、⁽⁹¹⁾
- (5) こちら岸からあちら岸に到るためである。

佛説という安全な岸辺についても同様である。

- (1) 破戒という垢を落とすため、
- (2) 欲という熱を鎮めるため、
- (3) 〔輪廻の生存を〕再び生み出す(再有の)渴愛を鎮めるため、
- (4) 〔四〕静慮と、〔五〕神通と、〔四〕無量と、〔八〕解脱などのすぐれた徳という楽しい遊びを経験するため、
- (5) 有身(*satkāya)という此岸から涅槃という彼岸に趣くためである。

それゆえ、安全な岸辺に依拠するという徳を望む者たちは、敬意をもって佛説を聴くべきである。

(徳慧注なし)

5.2.14 絵姿 (VyY, D shi 121b7-122a3, P si 141b7-142a3)⁽⁹²⁾

3つの因から、布に絵姿を描くことがかなわない。

- (1) 布が振動し、汚れ、継ぎ合わせてあるという過失により、
- (2) 美しくない顔料により、
- (3) 絵師(*citrakāra)が巧みでないことにより。

聴き手である人の意という布に、正知という絵姿を描くのも同様である。

- (1) 散乱と、蓋と、以前の障害(*āvaraṇa)⁽⁹³⁾によって、〔順に、〕そ〔の意〕が

振動し、汚れ、平らでないという過失により、

(2) 悪しく説かれた教え（法）という美しくない顔料により、

(3) 説法者という絵師が巧みでないことにより。

それゆえ、⁽⁹⁴⁾顔料に過失はない。〔佛の〕教えは、善く説かれたからである。あなた方にも、あるいは我々にも、過失はある。それを取り除くため、あなた方も敬意をもって佛説を聴くべきであり、我々も敬意をもって説こう。

徳慧注（VyYT, D si 287a2-3, P i 175a2-4）

(1) 布が振動し、汚れ、継ぎ合わせてあるという過失によりとは、振動性という過失により、汚れているという過失により、継ぎ合わせてあるという過失により。

(1) 散乱と、蓋と、以前の障害によって、とは、散乱によって〔その意が〕振動するという過失と、蓋によって〔その意が〕汚れるという過失と、以前の業の障害（*karmāvaraṇa）によって〔その意が〕平らでないという過失である。

5.2.15 正法を聴くことの5つの徳性（VyY, D shi 122a3-4, P si 142a3-5）⁽⁹⁵⁾

正法の聴聞には5つの徳性がある。

(1) 知らなかったことを知らせ、

(2) 誤って捉えていたことを棄て、

(3) 疑わしいことに決着をつけ、

(4) 決定されたことを堅固にし、⁽⁹⁶⁾

(5) 聖者の慧眼を磨くことである。

それゆえ、敬意をもって正法を聴くべきである。

（徳慧注なし）

5.2.16 愚者（VyY, D shi 122a4-5, P si 142a5-6）

盲人（*andha）は、教主の徳の道をも得る可能性があるが、〔教えを聴かな

い⁽⁹⁷⁾ 愚者は、悪〔趣〕に堕ちるならば〔道を得る可能性が〕ない。それゆえ、
盲人はまし⁽⁹⁸⁾ (*varam) であるが、愚者は決してそうでない。愚かさの原因は、
〔教えを〕聴かないことである。

それゆえ、「いかにして愚者にならないであろうか」と考えて、敬意をもって
法を聴くべきである。

徳慧注 (VyYT, D si 287a3, P i 175a4-5)

愚者は、すなわち愚癡者は、教主の徳によってさえ、説法の道を得ることは
ない。

5.2.17 猿 (VyY, D shi 122a5-6, P si 142a6-7)⁽⁹⁹⁾

心が猿のように動揺するのには2つ〔の原因〕がある。散乱と居眠りである。
それ〔ら〕を服従させるため、〔説法者は〕「敬意をもって佛説を聴くべき
だ」と言うべきである。

(徳慧注なし)

5.2.18 3つの徳と3種の人物 (VyY, D shi 122a6-b2, P si 142a7-b2)

(1) 一部の者たちは、道に誤って入ってしまったとしても、順に実践
したならば、利益(薬)となる。

(2) 〔一部の者たちは、〕良〔薬〕と悪〔薬〕の両方を吟味したならば、
その意欲に従って、考察し、趣くがよい。

(3) 一部の者たちにある錯乱を取り除いて後、〔彼らは、〕「みずから浄
化されるはずだ」とこ〔のとおりに〕知⁽¹⁰⁰⁾って、意欲〔だけ〕でも〔起るこ
とが〕⁽¹⁰¹⁾あり得る。

その3つの徳を考察して、牟尼王の教説を敬意をもって聴け、と語るべ
きである。⁽¹⁰²⁾

またそれは3〔種〕の人物を趣意して説かれたのである。3〔種〕の人物とは、

- (1) 至福⁽¹⁰³⁾に誤って入る者,
- (2) 実践したいと思っているが, [実践法を] 知らない者,
- (3) 実践したいとも思わず, ひたすら放逸で, 汚れた業を有する者である。⁽¹⁰⁴⁾

徳慧注 (VyYT, D si 287a3-b1, P i 175a5-b3)

(1) 一部の者たちは, 道に誤って入ってしまったとしてもと詳細に出ており, ないし, (3) 「浄化されるはずだ」とこ〔のとお〕知って, 意欲〔だけ〕でも〔起ることが〕あり得るに至るまでは, 大徳マートリチェータが, 世間の人々を真実へと導き入れるためにお説きになられたのである。

〔世親〕師も, 一部の者たちは, 道に誤って入ってしまったとしてもと詳細に出ている彼(大徳マートリチェータ)の詩に対して, その3つの徳をと詳細に出ている自身の詩⁽¹⁰⁵⁾によって, 牟尼王のおことばのためにお説きになられたのである。

そ〔の詩〕の中で, 3つの徳は,⁽¹⁰⁶⁾偈では欠点として, 〔すなわち〕(1) 誤りの因となっているものと, (2) 良〔薬〕と悪〔薬〕の吟味と, (3) 意欲⁽¹⁰⁷⁾だけでも起こること, と説かれたものである。

またそれはとは, この偈に説かれた徳は, 3〔種〕の人物を趣意して説かれたのであるが, 3〔種〕の人物とは, (1) 至福に誤って入る者である。そのため, 一部の者たちは, 道に誤って入ってしまったとしてもと詳細に説かれている。

(2) 実践したいと思っているが, [実践法を] 知らない者である。そのため, 〔一部の者たちは,〕良〔薬〕と悪〔薬〕の両方を吟味したならばと詳細に説かれている。

(3) 実践したいとも思わず, ひたすら放逸で, 汚れた業を有する者である。そのため, 一部の者たちにある錯乱を取り除いて後と詳細に説かれている。

(未完)

略号と参考文献

- BHSD Franklin EDGERTON, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. 2: Dictionary. Kyoto: Rinsen Book Co., 1985.
- D デルゲ版チベット大蔵経.
- MW Sir Monier MONIER-WILLIAMS et al., *A Sanskrit-English Dictionary*. Tokyo: Meicho Fukyu Kyokai, 1982.
- Negi Je Esa NEGI, *Bod skad dang Legs sbyar gyi tshig mdzod chen mo (Tibetan-Sanskrit Dictionary)*. Sarnath/Varanasi: CIHTS, 1993–2005.
- P 北京版チベット大蔵経.
- T 大正新脩大蔵経.
- 蔵漢大辞典『蔵漢大辭典』, 北京: 民族出版社, 2000.

一次文献

バリリ仏典の略号については *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。

- AAV *Abhisamayālaṃkāravṛtti* (Vimuktisena/-śeṇa): LEE Youngjin (Ed.), Napoli 2017; Corrado PENSA (Ed.), Roma 1967.
- AAV(Tib) The Tibetan Translation of the AAV. D 3787, P 5185.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): P. PRADHAN (Ed.), Patna 1967.
- AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): U. WOGIHARA (Ed.), Tokyo 1932–1936.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra?): N. TATIA (Ed.), Patna 1976.
- AvDh *Arthavastaro nāma dharmaparyāya*. HARTMANN 1991.
- Bhaiṣaj *Bhaiṣajyavastu*. Nalinaksha DUTT (Ed.), Calcutta 1947.
- CS *Carakasamhitā*. Vaidya Jādavji Trikamji Āchārya (Ed.), Varanasi 2001. (Chaukhambha, 5th Ed.)
- GAS *Gāthārthasaṃgraha* (Unknown): D 4103, P 5604.
- LAS *Laṅkāvatārasūtra*. NANJIO Bunyiu (Ed.), Kyoto 1923.
- LAS(Tib) The Tibetan Translation of the LAS. D 107, P 775.
- MSABh *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (Vasubandhu): Sylvain LÉVI (Ed.), Paris 1907.
- MSABh(Chin) The Chinese Translation of the MSABh. T31, No. 1604.
- MSABh(Skt) The Sanskrit Manuscripts A and B of the MSABh. Cf. MIKOGAMI Esho (Ed.), Kyoto 1995.
- MSABh(Tib) The Tibetan Translation of the MSABh. D 4026, P 5527.
- Mvy(IF) *Mahāvīyutpatti*. ISHIHAMA Yumiko and FUKUDA Yōichi (Eds.), Tokyo 1989.
- Mvy(S) Ibid., SAKAKI Ryōzaburo (Ed.), Kyoto 1916–1925.
- ŚrBh I *Śrāvakabhūmi*, the prathamam yogasthānam. ŚRĀVAKABHŪMI STUDY GROUP (Ed.), Tokyo 1998.
- TG(Tib) The Tibetan Translation of the *Tathāgataguhyaka*. D 47, P 760–3.
- TJ *Madhyamakahrdayavṛttitarkajvālā* (Bhavya/Bhāviveka?): D 3856, P 5256.

VyY *Vyākhyāyukti* (Vasubandhu): D 4061, P 5562.

VyYT *Vyākhyāyuktiṭīkā* (Guṇamati): D 4069, P 5570.

『中阿』『中阿含經』 T1, No. 26.

『雜阿』『雜阿含經』 T2, No. 99.

『增阿』『增一阿含經』 T2, No. 125.

*Bu ston chos 'byung bde bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung
rab rin po che'i mdzadces bya ba* (Bu ston rin chen grub): rDo rje rgyal po (Ed.),
Beijing 1988.

SBG *Sgra shyor bam po gnyis pa*. ISHIKAWA Mie (Ed.), Tokyo 1990.

二次文献

伊久間 洋光

2013「『如来秘密經』の梵文写本について」『印度學佛教學研究』 61-2: (171)–(175).

石上 和敬

2000「一音説法の諸相（部派史料編）」『印度學佛教學研究』 48-2: (107)–(111).

2001「一音説法の諸相（大乘仏典編）」『空と実在：江島惠教博士追悼論集』，東京：
春秋社，65–76.

石川 美恵

1993『二卷本訳語釈一和訳と注解一』，東京：東洋文庫。

上野 牧生

2012a「『釈軌論』における阿含經典の語義解釈法（2）」『佛教學セミナー』 95: 1–35.

2013b「ヴァスバンドウの經典解釈法（3）—語義（*padārtha*）—」『佛教學セミナー』 98: 1–65.

2017「ヴァスバンドウの經典解釈法（1）—經典の目的（*sūtrāntaprayojana*）—」『佛
教學セミナー』 105: 45–104.

2018「『プトン佛教史』試訳（1）」『真宗総合研究所研究紀要』 35: 125–141.

上野 牧生・堀内 俊郎

2018「世親作『釈軌論』第5章翻訳研究（1）」『国際哲学研究』 7: 117–138.

勝本 華蓮

2017『原始仏典Ⅲ 増支部經典 第三卷』，東京：春秋社。

櫻部 建・小谷 信千代

1999『俱舍論の原典解明 賢聖品』，京都：法蔵館。

声聞地研究会

1998『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』, 東京: 山喜房佛書林.

長尾 雅人

2007b『『大乘莊嚴經論』和訳と註解 長尾雅人研究ノート 第2巻』, 京都: 長尾文庫.

袴谷 憲昭

1973「『大乘莊嚴經論』 散文箇所著者問題について」『駒澤大学佛教学部論集』4: 1-12.

2008『唯識文献研究』, 東京: 大蔵出版.

袴谷 憲昭・荒井 裕明

1993『新国訳大蔵経 17 大乘莊嚴經論』, 東京: 大蔵出版.

堀内 俊郎

2009『世親の大乘仏説論—『釈軌論』第四章を中心に—』, 東京: 山喜房佛書林.

2016『世親の阿含経解釈—『釈軌論』第2章訳註—』, 東京: 山喜房佛書林.

八尾 史

2011「『根本説一切有部律』『薬事』における経典「引用」の諸相 (2)」『仏教研究』39: 179-199.

2013『根本説一切有部律薬事』, 東京: 連合出版.

矢野 道雄

1988『インド医学概論: チャラカ・サンヒター』, 東京: 朝日出版社.

李 鐘徹

2001『世親思想の研究—『釈軌論』を中心として—』, 東京: 山喜房佛書林.

CHUNG, Jin-il

2008 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama.*
Tokyo: The Sankibo Press.

CHUNG, Jin-il and FUKITA, Takamichi

2011 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Madhyamāgama.*
Tokyo: The Sankibo Press.

GLASS, Andrew

2007 *Four Gāndhārī Saṃyuktāgama sūtras : Senior Kharoṣṭhī fragment 5*. Seattle: University of Washington Press.

HARTMANN, Jens-Uwe

1991 *Untersuchungen zum Dīrghāgama der Sarvāstivādins*. Unpublished Habilitation Thesis. Göttingen.

LAMOTTE, Étienne

1976 *The Teaching of Vimalakīrti : Vimalakīrtinirdeśa : from the French translation with introduction and notes (L'enseignement de Vimalakīrti)*. London: Pali Text Society.

LEE, Youngjin

2017 *Critical edition of the first Abhisamaya of the commentary on the Prajñāpāramitā Sūtra in 25,000 lines by Ārya-Vimuktiśeṇa, based on two Sanskrit manuscripts preserved in Nepal and Tibet*. Napoli: Università degli studi di Napoli "L'Orientale".

OBERMILLER, E.

1931 *History of Buddhism (Chos-ḥbyung) by Bu-ston*, Part 1. Heidelberg: Institut für Buddhismus-Kunde.

SKILLING, Peter

2000 "Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature," *Journal of International Association of Buddhist Studies* 23-2: 297-350.

TSHUL KHRIMS skal bzang khang dkar (ツルティム・ケサン・カンカル／白館 戒雲)

1984 *A Synthetic Study of the Treatises of Maitreya-nātha*. New Delhi: Western Tibetan Cultural Association.

2011 *Byang chos bskyar zhib drang nges mdzes rgyan*. Kyoto: Tibetan Buddhist Culture Association. (邦題：『弥勒法の研究：「未了義了義論」の麗飾』，京都：西藏仏教文化協会。TSHUL KHRIMS 1984 の改訂増補版)

2014 *Byang chos bskyar zhib drang nges mdzes rgyan*. Chengdu: Si-khron dus deb tshogs pa si-khron mi rigs dpe skrun khang. (本書は『ツルティム・ケサン全集』の第四巻であり，TSHUL KHRIMS 2011 の再録。ただし 2011 の脚注の内容が本書では本文中に挿入されており，頁数には異同がある)

Notes

- (1) 世親は『釈軌論』第5章を「説法者」(dharmakathika) に向けて論じているが

(VyY 5.0.1, 上野・堀内 2018: 118 を参照), その「説法者」の実態はあまり明確でない。『釈軌論』第1章から第4章までを見る限り, 人々に經典を説き聞かせ, またその解釈をも講じる役割を担っていたと予想され, さらに第5章を見る限り, 様々な法話をも行なっていたようである。

- (2) 「聴衆を教える器たるものとするため」(*parśado deśanābhājanatvāpādanārtham*) という表現は, VyY 5.2.1 「3種の器の喩え」と並行する記述を有する『縁起經論』(*Pratītyasamutpādayākhyā*)にある。上野・堀内 2018: 135, n. 38 を参照。
- (3) 上野・堀内 2018: 137, n. 67 に示したように, 『釈軌論』第5章には世親から説法者(の予備軍)に向けた指示とも受け取れる文言が散見される。そのため, 第5章を世親の手になる法話例集とみなすこともできよう。
- (4) 当該箇所は『プトン佛教史』(*Bu ston chos 'byung* 14.1-16.11, OBERMILLER 1931: 25-30)に引用されている。
- (5) 前出。VyY 5.1.1, 上野・堀内 2018: 119-120 を参照。
- (6) 世親に関連する諸文献における一音説法の用例については石上 2000 を参照。一音説法に関する用例を網羅した先行研究については石上が挙げる LAMOTTE 1976: 12-13, note を参照。
- (7) 『宝積經』第三会に相当する初期大乘經典であり, *Tathāgataḡuhyaka* (梵文写本による), あるいは *Guhyakādhipatinirdeśa* (MSABh による), あるいは *Tathāgatacintyaḡuhyānirdeśa* (蔵訳による) と呼ばれる。梵文写本がベンガルの Asiatic Society に所蔵されており, 伊久間洋光がその解説にあたっているという(伊久間 2013)。漢訳は竺法護による『大宝積經』「密迹金剛力士会」(大正 No.310, 3 世紀), および宋・法護による『佛說如來不思議秘密大乘經』(大正 No.312, 11 世紀)がある。蔵訳(9 世紀)は D no. 47, P no.760-3 他多数。

『釈軌論』では当該箇所以降, この經典の 60 種音声の引用に続き, 經句の一つ一つが注釈される。『釈軌論』の注釈文とほとんど同文が『大乘莊嚴經論釈』の第12章 (MSABh 79.16-81.1) にも確認され, その注釈文が「無著 (Asaṅga) の言」として解脱軍 (Vimuktisena/-ṣena) の『現觀莊嚴論釈』に引用されている (AAV LEE 144.8-9: ... ity ācāryāsaṅgaḡ)。

それらを対象とした先行研究に OBERMILLER 1931; 袴谷 1973 = 袴谷 2008; TSHUL KHRIMS 1984 の増補改訂版である TSHUL KHRIMS 2011; 李 2001: 55ff.; 長尾 2007b; LEE 2017 などがある。『プトン佛教史』の英訳である OBERMILLER 1931: 25-30, ns.206-269 は, プトンが引用する 60 種音声(詳しくは後述)を英訳しつつその注記において『大乘莊嚴經論釈』と『釈軌論』との異同について詳細に言及し, 適宜, 『釈軌論注』を援用して整合的な理解を試みている。袴谷 2008: 299-313 は『大乘莊嚴經論釈』と『現觀莊嚴論釈』の梵文(現在は旧版となった Pensa 113.8-115.2)を対照し, その異同について詳細に注記した。TSHUL KHRIMS 2011: 76f. は『大乘莊嚴經論釈』と『現觀莊嚴論釈』第1章, および『釈軌論』第5章と『思摂炎論』第3章 (TJ, D dza 142b7-143a7) の注釈を対照した(4 文献とも全てチベット訳の対照。272f. の解説も併せて参照)。なお, これら諸文献における 60 種音声は Mvy(S) 445-504; Mvy(IF)

444-503 に対応するが、長尾 2007b: 178f. は『大乘莊嚴經論』無性釈 (MSAT)・安慧釈 (SAVBh) をも勘案した翻訳を詳細な注記付きで提示するとともに、長尾 2007b: 183f. は Mvy(S), MSAT, SAVBh, MSABh(Chin) の 4 文献における 60 種音声に対照した。LEE 2017: 193-196 はネパール写本とチベット写本に基づく『現觀莊嚴論釈』第 1 章の梵文テキストの再構成であるが、その脚注において MSABh(Skt), MSABh(Tib) との異同を詳細に注記し、AAV のテキストを確立した。これらの先行研究は『釈軌論』の解説に資する。

『ブトン佛教史』では、『釈軌論』第 5 章の当該箇所 (VyY 5.2.6) に準拠しつつ、60 種音声については AAV(Tib) からの引用という形が採られ (*Bu ston chos 'byung* 16.12-13: zhes 'phags pa thogs med gsung ngo || zhes nyi khyi snang bar bshad do || 「... (60 種音声の列举) ... と、聖者アサンガが仰っている」と、『二万五千 (須般若の注釈である現觀莊嚴) 光明論』に説かれている。)、さらに、60 種音声に言及する上記以外の文献として、『瑜伽師地論』、『十万須般若広注』(**Śatasāhasrikābrhṣṭīkā*)、『大乘莊嚴經論』の注釈、『釈軌論』を挙げる。その他、筆者らが気がついた限りでは、『牟尼意趣莊嚴論』や『有為無為決択論』にも類例がある。

- (8) 当該の引用は『大乘莊嚴經論釈』と全く平行する (太字は『釈軌論』所引経文との対応箇所を示す)。MSABh 79.15-17: *ṣaṣṭyaṅgi śācintyā yā guhyakādhīpatinirdeśe buddhasya ṣaṣṭyākārā vāg nirdiṣṭā. punar aparāṃ śāntamate tathāgatasya ṣaṣṭyākāropetā vāg niścaraṭi* (1) *snīghā ca* (2) *mrdukā ca* (3) *manojñā ca* (4) *manoramā ca* (5) *śuddhā ceti vistarah.*

『大乘莊嚴經論釈』では (6) 以下の引用が省略されるのに対し、『釈軌論』では 60 種音声すべてが引用される点に違いがある。しかし、60 種音声の一つ一つが注釈される MSABh 79.17-81.1 は VyY とほぼ同文である。

- (9) 漢訳 2 本の間に齟齬があり、竺法護訳は 60 種音声であるが、宋・法護訳は 64 種音声である。袴谷 2008: 307, n. 8 が「両経を MSABh, AAV 中の六〇種と比較すると、前者の経はその数は一致するが、列举の仕方、その訳語にはなお検討すべき余地が残る。その点後者の方が、数こそ一致しないが内容的にはむしろ一致する」と指摘する特徴は、『釈軌論』にも当てはまる。

竺法護訳『大寶積經』「密迹金剛力士会」(大正 No.310), T11, 55c20-56a5: 如來言辭出六十品。各異音聲。何謂六十。(1) 吉祥音。(2) 柔軟音。(3) 可樂音。(4) 悅意清淨音。(5) 離垢音。(6) 顯曜音。(7) 微妙音。(8) 明聽音。(9) 無亂音。(10) 無憤音。(11) 師父音。(12) 無剛鞭音。(13) 無毘獵音。(14) 善順音。(15) 安重音。(16) 身所吉和音。(17) 隨心時音。(18) 空悅音。(19) 與愛安想音。(20) 無惱熱音。(21) 方正音。(22) 識達音。(23) 親近音。(24) 意好音。(25) 歡悅音。(26) 和教音。(27) 曉了音。(28) 精勤音。(29) 忍和音。(30) 重了音。(31) 其響去穢音。(32) 應師子音。(33) 龍鳴音。(34) 雨好音。(35) 海雷龍王音。(36) 眞陀羅伎音。(37) 哀鸞音。(38) 鷹暢音。(39) 鶴鳴音。(40) 耆域音。(41) 英鳥音。(42) 雷震音。(43) 不卒音。(44) 不暴音。(45) 普入響音。(46)

去非時音。(47) 無乏音。(48) 無怯音。(49) 悅豫音。(50) 通暢音。(51) 戒禁音。(52) 美甘音。(53) 進行音。(54) 廣普音。(55) 具足音。(56) 諸根無瑕音。(57) 不輕疾音。(58) 無住音。(59) 響普入衆會音。(60) 宜諸德音。密迹金剛力士謂寂意菩薩。是爲如來六十品音。

宋・法護訳『佛說如來不思議祕密大乘經』(大正 No. 312), 第八品(如來語密不思議品 = *vāgguhyaparivarta*), T11, 719c6-723c21: 寂慧當知。如來語言具有六十四種殊妙之相。何等名爲六十四種。一者流澤。二者柔軟。三者悅意。四者可樂。五者清淨。六者離垢。七者明亮。八者甘美。九者樂聞。十者無劣。十一者圓具。十二者調順。十三者無澁。十四者無惡。十五者善柔。十六者悅耳。十七者適身。十八者心生勇銳。十九者心喜。二十者悅樂。二十一者無熱惱。二十二者如教令。二十三者善了知。二十四者分明。二十五者善愛。二十六者令生歡喜。二十七者使他如教令。二十八者令他善了知。二十九者如理。三十者利益。三十一者離重複過失。三十二者如獅子音聲。三十三者如龍音聲。三十四者如雲雷吼聲。三十五者如龍王聲。三十六者如緊那羅妙歌聲。三十七者如迦陵頻伽聲。三十八者如梵王聲。三十九者如共命鳥聲。四十者如帝釋美妙聲。四十一者如振鼓聲。四十二者不高。四十三者不下。四十四者隨入一切音聲。四十五者無缺減。四十六者無破壞。四十七者無染汚。四十八者無希取。四十九者具足。五十者莊嚴。五十一者顯示。五十二者圓滿一切音聲。五十三者諸根適悅。五十四者無譏毀。五十五者無輕轉。五十六者無動搖。五十七者隨入一切衆會。五十八者諸相具足。復次寂慧。五十九者如來所出語言。普令十方一切世界一切衆生心意歡喜。(中略)復次寂慧。六十者。一切衆生其數無量。一切衆生行亦無量。(中略)復次寂慧。六十一者。如來語祕密智。隨入一切衆生心意。然其語言不從如來口門中出。但從虛空而出。(中略)復次寂慧。六十二者。如來所出語言。隨諸衆生種種信解。隨諸衆生心意成熟。普使隨應而得了知。(中略)復次寂慧。六十三者。諸佛如來所有音聲。無其分量。我不見有世間一切天人魔梵沙門婆羅門等。能知如來音聲邊際及分量者。(中略)復次寂慧。六十四者。所有一切衆生心心所轉。而一衆生心多於彼。……

後者(宋・法護訳)と MSABh, AAV との異同について、袴谷 2008: 307, n. 8 は「第一―第四八までは MSABh, AAV の (1) - (48) に完全に対応し、第五二―第五八までが両論の (54) - (60) に対応する。第五九―第六四として数えられるものは本来列挙すべき性質のものではないから、これを除外すれば、異同は第四九―第五一の間にのみあると考えなければならない」と指摘する特徴も、やはり『釈軌論』に当てはまる。

蔵訳 *'phags pa de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa* についても、袴谷 2008: 307, n. 8 が指摘するように、数は法護訳の 64 種音声に一致するものの、内容は MSABh (および VyY) の 60 種音声に一致し、その (59) と (60) の間に「欲貪を鎮める」「瞋恚を抑制する」「愚癡を除去する」「魔を打ち破る」の 4 項が加えられているため(以下の (60) - (63) に相当)、合計 64 種音声となる。TG(Tib), D ka 133a6-b5, P tshi 152a4-b4: zhi ba'i blo gros de bzhin gshegs pa'i gsung ni nam pa drug cu[D]; bcu P) rtsa bzhi dang ldan par 'byung[D]; 'gyur P) ste | nam pa drug

cu rtsa bzhi gang zhe na | 'di lta ste (1) mnyen pa'i gsung 'byung ba dang | (2) 'jam pa dang | (3) yid du 'ong ba dang | (4) yid du 'thad pa dang | (5) dag pa dang | (6) dri ma med pa dang | (7) 'od gsal ba dang | (8) snyan cing 'jebs(D); 'jobs P) pa dang | (9) mnyan par 'os pa dang | (10) mi tshugs pa dang | (11) snyan pa dang | (12) dul ba dang | (13) mi rtsub pa dang | (14) mi brlang ba(D); brlangs pa P) dang | (15) rab tu dul ba dang | (16) rnar snyan pa dang | (17) lus sim par byed pa dang | (18) sems tshim par byed pa dang | (19) snying dga' bar byed pa dang | (20) dga' bde skyed pa dang | (21) yongs su gdung ba med pa dang | (22) kun tu shes par bya ba dang | (23) rnam par rig par bya ba dang | (24) rnam par gsal ba dang | (25) dga' bar byed pa dang | (26) mngon par dga' bar byed pa dang | (27) kun shes par byed pa dang | (28) rnam par rig par byed pa dang | (29) rigs pa dang | (30) 'brel ba dang | (31) zlos pa'i(D); pa P) skyon med pa dang | (32) seng ge'i sgra'i shugs can dang | (33) glang po che'i sgra skad dang | (34) 'brug gi sgra dbyangs dang | (35) klu'i dbang po'i sgra dang | (36) dri za'i glu dbyangs dang | (37) bya ka la ping ka'i sgra dbyangs dang | (38) tshangs pa'i sgra dbyangs bsgrags pa dang | (39) shang shang 'te'u'i(D); te'u yi P) sgra dbyangs su grags(P); grag D) pa dang | (40) lha'i dbang po'i dbyangs ltar snyan pa dang | (41) mnga'i sgra dang | (42) ma khengs pa dang | (43) mi dma' ba dang | (44) sgra thams cad kyi rjes su zhugs pa dang | (45) tshig zur chag pa med pa dang | (46) ma tshang ba med pa dang | (47) ma zhum pa dang | (48) mi zhan pa dang | (49) rab tu dga' ba dang | (50) khyab pa dang | (51) chub pa dang | (52) rgyun chags pa dang | (53) 'brel ba dang | (54) sgra thams cad rdzogs par byed pa dang | (55) dbang po thams cad tshim par byed pa dang | (56) ma smad pa dang | (57) mi 'gyur ba dang | (58) ma brtabs(D); rtags P) pa dang | (59) 'khor kun tu grags(P); grag D) pa dang | (60) 'dod chags zhi bar byed pa dang | (61) zhe sdang 'dul ba dang | (62) gti mug sel ba dang | (63) bdud tshar gcod pa dang | (64) rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan par 'byung ba ste | zhi ba'i blo gros de bzhi gshegs pa'i gsung ni yan lag drug cu rtsa bzhi po de dag dang ldan par 'byung ngo ||

TG(Tib) と, MSABh(Tib), AAV(Tib), VyY との異同は『プトン佛教史』にも次のように言及されている。『『不可思議秘密經』には 64 種音声が説かれている。(59)「あらゆる集會に伝わる」の後に、(60)「欲貪を鎮める」、(61)「瞋恚を抑制する」、(62)「愚癡を除去する」、(63)「魔を打ち破る」と出ており、弥勒が「不可思議なる 60 種の〔音声〕」と〔MSA 12.9c にて〕述べ、聖者無著や解脱軍や世親など、〔佛陀の〕教説について基準たる方々が「その同じ經には 60 種が説かれている」と述べているので、語句の挿入であるかどうかを見極めるがよい。」(Bu ston chos 'byung 16.15-20: gsang ba bsam gyis mi khyab pa'i mdor gsung dbyangs yan lag drug cu rtsa bzhi mdzad de | (59) 'khor kun tu grags pa'i rjes su (60) 'dod chags zhi bar byed pa dang | (61) zhe sdang 'dul ba dang | (62) gti mug sel ba dang | (63) bdud tshar gcod pa dang | zhes 'byung la | byams pas | yan lag drug cu bsam mi khyab || ces 'byung zhing | 'phags pa thogs med dang grol sde dang dbyig gnyen la sogs pa gsung rab la tshad mar gyur pa nams kyis mdo de nyid las yan lag drug cur bshad ces 'byung bas tshig lhad bcug pa yin

min dpyad par rigs so ||; OBERMILLER 1931: 29-30)

- (10) 以下、便宜的に「如来の 60 種音声」箇所を (1) - (20), (21) - (40), (41) - (60) の 3 節に分節する。これはあくまで便宜的な措置であり、60 種音声は全て §5.2.6 に属する。また、60 種音声の翻訳に丸括弧で付した梵文は、MSABh 79.17-81.1 を『釈軌論』のチベット訳テキストに基づき微修正したものである。
- (11) snigdha MW s.v.: sticky, viscous or viscid, glutinous, unctuous, slippery, smooth 他多数。藏漢大辞典 s.v.: 柔軟, 柔和, 温潤。なめらかで滋養に富んだ水分が植物の根を生育させるように、世尊の音声は衆生の善根を養育するという意味であろうか。長尾訳は「穏和」。
- (12) rton] VyYT(P); ston VyY(D) VyYT(D); bston VyY(PL). Cf. Negi rton pa s.v.: upastambhāḥ, pratiśaraṇam, etc.
- (13) VyY mthong ba'i chos kho na la reg na bde ba'i phyir に従って「他ならぬ現世において触れるとき心地よいから」と訳した。MSABh drṣṭa eva dharme sukhasaṃsparśatvāt に対する長尾訳は「正しく現在世において安楽に触れさせるから」。
- (14) ここでの「善い」(su) は、『釈軌論』第 2 章で示された su に関する 3 種の語義のうち②「称赞」(praśasta, 「すばらしい」)に相当するであろうか。第 2 章における su の 3 義については堀内 2016: 181 を参照。
- (15) snyan pa = *kala. 袴谷・荒井 1993: 426 はおそらく BHSD kala s.v. に基づき「技巧的なこと」と訳し、長尾は「円やかな」と訳す。ここではチベット訳に基づき「快適な」と訳した。
- (16) MSABh rāgādi. 袴谷 2008: 308, n. 11 が指摘するように、MSABh は Skt, Tib ともに rāgādi であるが、VyY および AAV は rāga- であるため、ādi を削除して読む。
- (17) sukhopāya MW s.v.: an easy means. それによれば bslab pa bca' ba'i thabs bde ba は「[戒] 学の設定が／のための容易な手段」。あるいは、「[戒] 学の設定の手段が安楽」も可能か。徳慧は後者の解釈のようである。なお、無性 (Asvabhāva) は『大乘莊嚴經論』の注釈にてこの文に対して 2 通りの注釈を施すが、その第一が「世尊による学〔処〕の制定は真実を理解するための容易な手段である」というもの (MSAT, D bi 105a6, P bi 117b6-7)。
- (18) VyY nges par 'byung ba'i thabs yang dag par ston pa (出離の手段を正しく教示する); MSABh samyagniḥsaraṇopāyopadeśaka (正しい出離の手段を教示する)。ここでは MSABh の読みを採る。Cf. ASBh 57.14: mithyāṇiḥsaraṇopāyam.
- (19) VyY bskyed(skyed); MSABh āvāhaka. ここでは MSABh の読みに基づき訳した。
- (20) VyY bskyed(skyed); MSABh āvāhaka. ここでは MSABh の読みに基づき訳した。
- (21) MSA 無性釈は、声聞たちも世間ではあるが佛や菩薩に比しては有上である(さらに上がある)という趣旨の注釈をしている (MSAT, D bi 105a1, P bi 117b1-2)。
- (22) 長尾 2007b: 180, n. 5 : 「声聞・独覺も世間を超出はしているが、「この上もなき」ものではない。佛・菩薩は世間を超してこの上もなきを得ており、更にその言葉はその後に得られる清浄世間智によるものであって、それゆえ「(5) 清浄なる」という。」

- (23) OBERMILLER 1931: 148, n. 214 が指摘するように, *valgu* を *balaguṇa* と語源的に解釈するという意味であろう。
- (24) ここでの「など」に関連して, MSA 安慧釈は, さらに「後になさないと誓うこと, 福德の随喜 (**puṇyānumodanā*) など」であるという (SAVBh, D mi 233a4-5, P mi 259a1)。
- (25) VyYT: *thabs dag gis nges par 'byung ba yang dag par ston pa yin pas so ||* (諸の手段によって出離を正しく教示するからである)。ここでも MSABh の読み (*samyagniḥsaraṇopāyopadeśaka*) に即して「正しい出離の手段を教示するからである」と訳した。
- (26) *thos pa las byung ba'i shes pa(pa) VyY(P) VyYT(DP); rab VyY(D)) phun sum tshogs pa'i rten yin pa'i phyir = *sāmpannaśrutamayajñānāśrayatvāt*: あるいは「完備された聞所成慧の拠り所／を拠り所とするもの」と読むべきか。確かに MSABh(Skt) によれば *sāmpanna* は形容詞ともみられるが, MSA 安慧釈が「聞所成慧の完備が生ずる原因と拠り所となっているから」(*thos pa'i shes rab phun sum tshogs pa skye ba'i rgyu dang gnas su gyur pa'i phyir* (SAVBh, D mi 233b7-234a1, P mi 259b6) と述べていることと, 『釈軌論』チベット訳の読みに従って「聞所成慧の完備の拠り所」と訳した。
- (27) *acintya*: 袴谷 2008: 308, n. 17; 長尾 2007b: 183-184, n. b は Lévi Ed.: *acintya* を *cintya*- に訂正し, (27) の対象が「思議を超えた法」, (28) の対象が「思議すべき法」(MSA 安慧釈によれば具体的には蘊・界・処・[十]地・波羅蜜を指す)であるとして, (27) と (28) の相違をこの点に見出している。袴谷, 長尾とも安慧釈を訂正の典拠としているようである。なお, 諸テキストの読みは *cintya*- を支持するものと *acintya*- を支持するものに大別される。『大乘莊嚴經論』の諸注釈文献, 漢訳『大乘莊嚴經論釈』, デルゲ版『大乘莊嚴經論釈』, 『思釈炎論』, 『牟尼意趣莊嚴論』などは *cintya* を支持する。一方で, 北京版『大乘莊嚴經論釈』, 『釈軌論』, 德慧注, 『有為無為決択論』などは *acintya*- を支持する。ここでは, チベット訳『釈軌論』をそのまま訳したが, 疑問も残る。
- (28) MSA 12.8, *vyañjanasampatti* に対する MSABh の注釈にも同じ説明が見られる (堀内 2016: 127, fn. 830 を参照)。MSABh 79.8: *yuktaiḥ padavyañjanair uddeśāt pramāṇāvirodhena*。
- (29) *sahita*: チベット訳 '*brel ba* に基づき, OBERMILLER の英訳は *duly connected* (with its subject-matter), 長尾訳は「連絡が通じている」。なお, 『釈軌論』第2章経節 (62), (66) でも, 説法や言葉と文字に関する形容詞として, ここと同じく *yukta*, *sahita* という語がこの順で出る。経節 (62) での *sahita* に対する世親の解釈は, 「(話の) 前後が連関しているので」ということ (堀内 2016: 118)。また, BHSD によれば *sahita* は (1) (= Pali id.) of speech, connected, coherent, sensible を意味する。
- (30) MSA 無性釈・安慧釈はこの (31) に関して, 佛陀が同義語を説くのは無意味でなく「目的」があるということについて「詳細は『釈軌論』を見よ」という(無性釈では *nam par bshad pa'i rigs pa* であるが, 安慧釈では *bshad par rigs pa'i bstan bcos* とのチベット訳が与えられている)。無性釈は以下のとおり。MSAT, D bi 105b5, P bi 118b1: *nam grangs(grangs) P; grangs mams D) kyī dgos(dgos) P; dgongs D) pa rgyas*

par ni nmam par bshad pa'i rigs pa las blta bar bya'o || 「同義語の広範な目的については『釈軌論』を参照すべきである。」安慧釈も同様の内容である。ここで言及されているのは『釈軌論』第1章における「世尊が同義語を説いた8つの目的」である。詳細は上野 2017: 54-57 を参照。この「8つの目的」は『釈軌論』以後の文献において最も引用・参照されている箇所であり、ダンマパーラの『ネーッティバカラナ・アッタカター』からパーリ語訳の『釈軌論』本文を回収し得る。

- (31) 長尾 2007b: 186, n. 11 は MSA の注釈文献がこの象について「天界の象」(airāvāṇa) と述べている旨を注記する。
- (32) VyY のテキストには dri za とある。dri za は通例では gandharva の訳語であろう。袴谷 2008: 309, n. 21 も注意するように、Mvy(S)480; Mvy(IF) 479 は gandharva の訳語として dri za を登録する。しかし MSABh, AAV には kinnara とあり、それに対応するチベット訳がすべて dri za であることから、必ずしも欽定訳語に基づく必要はないと考え、『釈軌論』当該箇所の原語を kinnara とみなした。なお、『二巻本訳語釈』によれば「kinnara というのは、神通力を持つ畜生を指す名称である。姿形が、人とはんの少し似ているので「人であろうか無かろうか」(緊那羅)と呼ばれる」(SBG no. 352, 石川 1993: 123)。
- (33) abhīkṣṇa: 袴谷 2008: 309.ns. 22, 23 は、Lévi 仏訳がこれを tīkṣṇa と訂正し、長尾索引もそれに従っていることを報告したうえで、氏自身は校訂本どおり (bhīkṣṇa) にしておくとして述べている。同書で挙げられる諸注釈の読みから見ても、また、実際に MSABh の A・B 両写本には 'bhīkṣṇa とあることから、袴谷氏の指摘は穏当と思われるが、ここでは MSABh のテキストについては論じない。他方、『釈軌論』および徳慧注では確実に abhīkṣṇa が想定される。そのチベット訳には rgyun mi chad pa とあり、Negi は rgyun mi chad par の項目で abhīkṣṇam や ābhīkṣṇam の用例を報告しているからである。以下は私見になるが、abhīkṣṇa と bhaṅgura の関係について、音声が間断ない (abhīkṣṇa) のであればうんざりして不快にもなろうが、それが変化に富む (bhaṅgura) から、快いのであろう。こうした理解のもと、「間断なく、かつ、変化に富む」と訳しておく。なお、OBERMILLER 1931: 150, n. 243 は Lévi 仏訳による tīkṣṇa との訂正案を支持し、『釈軌論』および徳慧注における rgyun mi chad pa は翻訳官によるミス (ランジャンナー文字における ta と bha の相似性に起因する) と断定している。しかし、迦陵頻伽は卵の段階から鳴き続けると様々な文献に説かれているため、ここでは tīkṣṇa (鋭い) よりも abhīkṣṇa (間断のない) がより適切と判断した。
- (34) 袴谷 2008: 304 が論ずるように、AAV では (39) の直後に注釈が付加されており、そこでは svara と ruta と ravita の差異が補足説明されている。AAV Pensa 114.8-11; Lee 143.7-9: tatra svaragrahaṇam arthapratyāyanalakṣaṇasya dhvaneḥ pratyāyanārtham. rutagrahaṇam tattatsamketapratyāyanārtham. ravitagrahaṇam tattadrutasamketānunādapratyāyanārtham. 「それら (37-39) における svararutaravita) の中で、svara という表記は意味の伝達を特徴とする音 (dhvani) を伝達するためである。ruta という表記はそれぞれ [の音] と協約した [意味] を伝達するためである。ravita という表記はそれ

ぞれの ruta と協約した音響 (anunāda) を伝達するためである。」

- (35) 'grub] VyYṭ (DP); sgrub VyY(DP), VyYṭ (DP) に従って VyY(DP) を訂正する。
(36) 徳慧注の当該箇所は OBERMILLER 1931: 149, n. 233 にも英訳されている。
(37) 『増阿』に2つの用例がある。『増阿』26.9 (第十八卷, 四意斷品第二十六, 第九經), T2, 640a4-9: 舍利弗當知。如來有四不可思議事。非小乘所能知。云何爲四。世不可思議。衆生不可思議。龍不可思議。佛土境界不可思議。是謂舍利弗有四不可思議。舍利弗言。如是世尊。有四不可思議。

『増阿』29.6 (第二十一卷, 苦樂品第二十九第六經) T2, 657a19-657c2: 爾時世尊告諸比丘。有四事終不可思惟。云何爲四。衆生不可思議。世界不可思議。龍國不可思議。佛國境界不可思議。(中略) 如是比丘。有此四處不可思議。非是常人之所思議。然此四事無善根本。亦不由此得修梵行。不至休息之處。乃至不到涅槃之處。但令人狂惑心意錯亂起諸疑結。

後者は AN 4.8.77 と平行する (和訳は勝本 2017: 116-117)。AN II 8014-26: cattār' imāni bhikkhave acinteyyāni na cintetabbāni yāni cinto ummāḍassa vighātassa bhāgī assa. katamāni cattāri. buddhānaṃ bhikkhave buddhavisayo acinteyyo na cintetabbo yaṃ cinto ummāḍassa vighātassa bhāgī assa, jhāyissa bhikkhave jhānavisayo acinteyyo na cintetabbo yaṃ cinto ummāḍassa vighātassa bhāgī assa, kammavipāko bhikkhave acinteyyo na cintetabbo yaṃ cinto ummāḍassa vighātassa bhāgī assa, lokacintā bhikkhave acinteyyā na cintetabbā yaṃ cinto ummāḍassa vighātassa bhāgī assa. imāni kho bhikkhave cattāri acinteyyāni na cintetabbāni yāni cinto ummāḍassa vighātassa bhāgī assāti.

なお、思議を超えると思われる事象については出入りがあり、『増阿』では「衆生」「世界」「龍国」「佛土」が挙げられ、AN では「佛陀の対象領域」「禪定者の対象領域」「業と異熟」「世界」が挙げられる。徳慧注によれば、「自分に対する心」「有情たちの業と成熟に対する心」「世界に対する心」「諸佛の佛陀の対象領域」を挙げる経節があり、さらに「有情たちの業と成熟」「静慮者たちの対象領域」「神通をそなえた者たちの神通の対象領域」を挙げる経節もある。徳慧注を総合すれば「有情たちの業と成熟」が重複するため、計6種が言及されていることになるが、これは『摂決摂分中間所成慧地』ないし『顕揚聖教論』に挙げられる「六種不可思議事」とは一致しない。両文献には「有情不可思議」が挙げられる一方で、徳慧注にある「神通をそなえた者たちの神通の対象領域」は挙げられないからである。『顕揚聖教論』T31, 510c2-6: 不可思議理趣者。略有六種不可思議事。一我不可思議。二有情不可思議。三世間不可思議。四一切有情業報不可思議。五證靜慮者及靜慮境界不可思議。六諸佛及諸佛境界不可思議。堀内 2016: 134, fn. 891 も参照。

- (38) yang dag par ston pa don med pa ma yin pa'i phyir ro || VyYṭ(DP)。しかし don med pa ma yin pa'i phyir ro は (31) の語句であり、後続する 'bras bu dang bcas pa'i phyir ro zhes bya ba'i tha tshig go はその注釈であるため、既出の類似構文 ('di ltar thos pa las byung ba bsam gyis mi khyab pa'i chos yang dag par ston pas so ||) に即してテキストを訂正する。具体的には、ston pa を ston pas so || に、don med pa ma yin pa'i phyir ro ||

はニシュエを削除して **don med pa ma yin pa'i phyir ro** に訂正する。

- (39) あるいは「思議すべき」か。注(27)を参照。
- (40) MSA 安慧釈は「敵を打ち負かした後の勝利の印として最初に太鼓の音をならす」という趣旨の注釈をしている (SAVBh, D mi 236a3-4, P mi 262a7-8)。
- (41) brda sprod pa thams cad = *sarvavyākaraṇa: MSA 安慧釈・無性釈ともに「授記(記別)」のことであると注釈するが、安慧釈は第2解釈として「五明処のなかの声明処」と注釈している (SAVBh, D mi 236b2, P mi 262b6)。徳慧注は「文法学」の方向で注釈しているため、ここでは「あらゆる文法学」と訳しておく。
- (42) tshig zur chag pa = *apaśabda: これが (44) に後続する点に着目すれば、「俗悪なことば」とは「文法が崩れたことば」(apabhraṃśa) を指すであろうか。
- (43) gdul ba'i] em.; gdul bar VyYṭ(DP); 'dul ba'i VyY(DP)
- (44) VyY chub pa; MSABh(Tib) tha ba med pa; MSABh akhilā; AAV sakalā; SAVBh tha ba dang bcas pa = *sakhilā. 『ブトン佛教史』において「別の翻訳では、(51) tha ba med pa が chub pa と……ある」(*Bu ston chos 'byung* 16.13: 'gyur gzhan las tha ba med pa la chub pa zhes 'byung zhing) と言及されているように、MSABh(Tib) と VyY では訳語が異なり、MSABh(Tib) と SAVBh の間でも訳語が異なる。ここでは、VyY の chub pa というチベット訳、および徳慧注からも sakala に類似した音節をもつ原語が予想されるため、原語を sakhilā と想定しておく。Cf. Mvy(S) 495; Mvy(IF) 494: chub pa = sakhilā.
- (45) VyY 'bel ba; MSABh(Tib) brjid pa. 『ブトン佛教史』において「別の翻訳では、……(53) brjid pa が 'bel ba とある」(*Bu ston chos 'byung* 16.13: 'gyur gzhan las brjid(em.); brjod) pa la 'bel ba zhes 'byung zhing) と言及されているように、MSABh(Tib) と VyY ではチベット訳が異なるものの、原語は lalita が想定される。(51) に対し長尾訳は梵原語 lalita でなくチベット訳 brjid pa に基づき「結びつける」と訳す。
- (46) gsung gcig = *ekasvara 「一音」。MSABh における (54) は石上 2001: 72 において少しく取り上げられている。
- (47) MSABh はこの (54) のみ末尾が pratyupasthāpanatvāt である。なお袴谷 2008: 303 (54) は (53) (55) と同様に pa を落とした形を記載している。長尾 2007b: 189 の和訳も三者を区別していないように思われる。なお『釈軌論』チベット訳も三者とも訳語が同一である (nye bar gnas pa'i phyir)。
- (48) bsgyur] VyYṭ(DP); sgyur VyY(DP)
- (49) dbang pos byas pa: ここではパーニニ以前の文法学者であるインドラの著作と理解した。
- (50) 「教授された法を説く」はわかりにくい。次注にて引用する『声聞地』では、「諫言し」「憶念させ」「教授し」「教誡し」「正法を説示する者」との五項目であるが、徳慧注では四項目であり、『声聞地』の「教授し」(avavāḍakaḥ) と「正法を説示する者」(dharmadeśakaḥ) とが gdams pa'i chos bstan pa という形で接合している。
- (51) 『声聞地』第一瑜伽処における以下の記述に相当すると思われる。ŚrBh I 218.1-7: katham vākkaraṇenopeto bhavati | pauryā vācā samanvāgato bhavati, valgvā, vispaṣṭayā,

vijñeyayā, śravaṇīyayā, apratikūlayā, anīśritayā, aparyantayā | evaṃ vākkaraṇenopeto bhavati kalyāṇavākyāḥ ||

sa ebhir aṣṭābhiḥ kāraṇaiḥ samanvāgataś codako bhavati, smārakaḥ avavādakaḥ, anuśāsakaḥ, dharmadeśakaḥ ||

「言説を具えた者とは如何。洗練された、美しい、明瞭な、わかりやすい、聴くに値する、不快でない、〔他者に〕依存せず、制限のない言葉を具えること、是の如くが言説を具える者であり、すばらしく説く者である。

彼はこれら八種の要因を具えて、諫言し、憶念させ、教授し、教誡（原文は「教誡」と誤植）し、正法を説示する者である。」（声聞地研究会 1998: 218-219 より訳文を抜粋）。なお、『声聞地』では当該箇所以下、「諫言」以下5項目の定義が続く。Cf.『釈軌論』第2章経節（64）、堀内 2016: 123ff.

(52) avadya と bhaya の関係については堀内 2016: 178, fn. 1212 を参照。

(53) sems can rnam kyī VyY(DP); sems can rnam kyis VyYṬ(DP)

(54) sakhila を sakala と語源的に解釈するという意味であろう。

(55) *de bzhin gshegs pa skye ba bstan pa'i mdo*, **Tathāgatopattinirdeśasūtra*. 『釈軌論』第4章に經典の名称のみが挙げられている。「大海〔という譬喩〕でもって世尊を称讃する」点、および本経が『華嚴経』『如来性起品』と推測される点については堀内 2009: 342-343, fn. 257 を参照。

(56) *de bstan pa'i nam pas*: (x) 徳の保持性のみならず、VyY 5.2.6 における 10 のあり方全体を指すであろうか。

(57) あるいは dhārmya-dharmacakra が原語である可能性もあろうか。

(58) 『俱舍論』『賢聖品』では「法輪は見道である」と定義されている（櫻部・小谷 1999: 331 より訳文を抜粋）。AKBh 371.4-5 ad k.54c:

dharmacakraṃ tu drūmārgaḥ (6.54c)

caṅkramaṇāc cakraṃ tatsādharmyād darśanamārgo dharmacakram.

「だが、法輪は見道である (6.54c)

進行する (caṅkramaṇa) から輪〔宝〕(cakra) である。見道はそ〔の輪宝〕と似ているから法輪である。」

(59) 前出。『釈軌論』第1章「語義」(1) における **dharmā** の⑦および第2章経節 (103) と同一の経文である。上野 2012a: 2, n. 10 および堀内 2016: 197-198, fn. 1357 を参照。

(60) rigs pa の推定原語として、naya の他、nyāya, nīti, yukti もあろう。

(61) kyis gos] em.; kyis chos VyY(D); kyī gos VyY(P)

(62) 正命の定義用語のひとつ。『中阿』31「分別聖諦經」、T1, 469b11-13: 但以法求衣, 不以非法。亦以法求食床座, 不以非法。是名正命。

CHUNG and FUKITA 2011 によれば『中阿』当該箇所平行する梵文資料はないようである。そのため「淨命虧損所攝」として正命の正反対の内容を述べる『声聞地』第一瑜伽処の梵文を参考にして原文を推定した。ŚrBh I 38*.27-39*.2: sa cādharmeṇa cīvaram paryeṣate na dharmeṇa, adharmeṇa piṇḍapātaṃ śayanāśanam glānapratyayabhaiṣaj-

yapaṣkāraṃ paryeṣate na dharmeṇa.

- (63) ⑦⑪とも『釈軌論』第1章「語義」(1)における語義解釈法と同じ構文である。詳細は上野 2012a: 1-2; 上野 2013b: 2-6 を参照。ただし、これらの前稿では⑪について「出典不詳」と記されているため、本稿前注の比定でもってその欠を補いたい。
- (64) 「法をそなえた法輪」(*dhārmika-dharmacakra) という術語に含まれる dharma には⑦と⑪双方の語義が含まれている、という意味であろう。徳慧注によれば *dhārmika に⑦が含まれているため、⑪は dharmacakra に含まれていることになろうか。
- (65) 『俱舍論』「賢聖品」に平行する表現がある。AKBh 371.20: tasya punaḥ pravartanaṃ parasantāne gamanaṃ arthajñāpanāt. 「そこで、そ〔の法門〕の転とは、〔説かれた法の〕意味を知らしめることによって〔法が〕他〔の所化（聞法者）〕の相続中に入り行くことである。」; AKVy 582.11-13: tasya punar iti dharmaparyāyasya. pravartanaṃ parasantāne gamanaṃ vineyajanasantāne preraṇam. kathaṃ gamanaṃ arthajñāpanāt. 「そこで、そのとは、〔その〕法門のということである。転とは、〔法が〕他の相続中に入り行くこと〔つまり〕所化の生類の相続に向かって行くこと（preraṇa）である。どのように〔入り〕行くのかと云えば、〔説かれた法の〕意味を知らしめることによってである。」（櫻部・小谷 1999: 337, 342 より訳文を抜粋）
- (66) na] em. ; bas na VyY(DP)
- (67) kyi] em. ; kyis VyY(DP)
- (68) HARTMANN 1991: 350 が注記するように、出典は『広義法門経』である。AvDh 7: (evaṃ) sa(22.1)myag dharmam śṛṇvan āryaśrāvakaḥ (1) (ka)thikaṃ ca na viheṭṭha(yati) (2) //rasaṃ ca veti (3) ///(śā)(18.c)stāraṃ <ca?> (20.4) paricarati (4) svakārthaṃ cānuprāpno(3.6)ti (5) nirvṛ(22.2)tiṃ cādhigacchati.
- (69) 当該箇所原文は mnyan pa であるため、「〔未来の時点において〕聴く」という意味である。
- (70) 解説者は「法を説く」「法を理解させる」という2つの行為を同一に行い得るが、聴聞者は「聴く」「実践する」という2つの行為を同一に行い得ない、という意味である。
- (71) 上引の『広義法門経』における nyan na (HARTMANN 1991 によれば śṛṇvan) には「原因の意味」(hetvārtha) が込められている、という趣旨である。佛説を聴いた時点で実践するわけではないが、聴いたことを原因として実践すれば、やがて5つの利点を得ることも可能である、という趣旨である。『釈軌論』第3章でも縁起の定型句 (asmiṃ sati) に見られる Loc. 表現に「原因の意味」があることが、同じ酥油（ギー）の喩えでもって説明されている。
- (72) 酥油（ギー）の効能のひとつに「脂肪を増大させること」があり、『チャラカサンヒター』には次の記述がある。「ギーは記憶力・知力・消化力・精力・オーガス（活力）・カパ（引用者注：水性）・脂肪を増大させ、ヴァータ（引用者注：風性）・ピッタ（引用者注：火性）・毒物・錯乱・疲労・不幸・発熱を除去し、すべての油脂類のなかで最も優れ、ラサ（引用者注：液体）の状態でもヴィパーカ（引用

者注：熟成)の状態でも冷却性と甘味をもち、無数のヴィールヤをもち、多くの用い方によって〔処方すると〕無数の効果をあげる。古いギーは狂気・健忘症・失神・疲労・錯乱・吐き気・発熱・子宮や耳や頭の疼痛を除去する。」(矢野 1988: 209)

- (73) 前出。上野・堀内 2018: 123, n. 35 を参照。
- (74) 本論では bdag dang gzhan という語順であり、徳慧注では gzhan dang bdag と逆である。
- (75) rna ma] VyYṭ(DP); rna ba VyY(DP)
- (76) 「盲人」は「〔佛説を聴く〕能力がなく誤った見解をもつ者」, 「目を閉じた者」は「〔佛説に〕耳を傾けない者」という対比であると思われる。
- (77) 当該箇所は『ブトン佛教史』に 2 回にわたって引用される。韻文のみの引用である前者は *Bu ston chos 'byung* 6.25-7.1; OBERMILLER 1931: 13-14, n. 98. 後者は *Bu ston chos 'byung* 46.7-11; OBERMILLER 1931: 81 and ns. 729, 730.
- (78) shes rab kyi khams: 第 5 章の冒頭にも見られる語句であり、下記の韻文の中の「智慧の種子」と同義であろう。上野・堀内 2018: 118.
- (79) 牛飼いのナンダが杖に寄りかかりながら世尊の話に耳を澄ませていたとき、その杖に一匹のカエルが押しつぶされていた。そのカエルは急所が断たれ、関節が割かれながらも「もし自分が身体を動かしたり声をあげたりすれば、ナンダが世尊の話を聴くことを妨害してしまう」と、世尊に対する信を起こして死に、四大王の神族の中に生まれた、というアヴァダーナを指す。SKILLING 2000: 346 によれば、当該のアヴァダーナは『薬事』(Bhaiṣaj 51.1-6; 八尾 2013: 271) に典拠をもつ。八尾 2011: 193, [3.2.28] によれば、平行資料は『雑阿』1174; 『増阿』43.3; SN 35.200 であり、Senior Collection にも対応箇所があるという (GLASS 2007: 14)。CHUNG 2008: 82 も併せて参照。
- (80) 当該箇所は「牛飼いのナンダのアヴァダーナをも述べよ」という、世親から説法者(の予備軍)に向けた指示と理解した。
- (81) 'dir yang bshad pa との導入句から、これは世親の手になる総括偈であろう。『薬事』の該当箇所にもこの総括偈は見当たらない。
- (82) 当該箇所は『頌義集』(GAS, D 240b2-5, P 260b8-261a3; SKILLING 2000: 325, n. 72), および『ブトン佛教史』(*Bu ston chos 'byung* 4.20-5.3; OBERMILLER 1931: 10; 上野 2018: 136-137) に引用されている。
- (83) yongs su gdung ba, Negi s.v.: paridāha, paritāpa, etc.
- (84) VyY de bzhin du sangs rgyas kyi gsung la dad pa bskyed pas; GAS de bzhin du sangs rgyas kyi gsung gi chu yang (1) dad pa skyed pas. GAS には「同様に、佛説という水も、(1) 信を生じさせることによって」とある。『釈軌論』本文を直すには及ばないが、当該箇所以降の例でも「佛説という X は」という表現が頻出するため、GAS の記述が好ましい。ここではひとつの可能性として、sangs rgyas kyi gsung gi chus kyang sangs rgyas kyi gsung la dad pas が本来の読み (= sangs rgyas kyi gsung の eye-skip) であった可能性を推測しつつ、現行のテキストに訂正を加えずに「同様に、佛説

「という水も」, (1) 信を生じさせることによって」と訳した。

- (85) gdul| VyY(DL) VyYT(DP); gdung VyY(P). なお, *Bu ston chos 'byung* の各版是北京版と同じく gdung (〔熱に〕 苦しむ者) という読みを採る (上野 2018: 136, n. 11)。しかし, (1) における佛説としての「水」がもたらす利益は「相続を湿らせること」であり, (3) の「熱 (yongs su gdung ba) を取り除くこと」とは異なると判断されるため, ここでは佛説の享受者としての「教化対象者」を指すと見る方が適切であろう。そして, 「水の喩え」は『頌義集』第 10 偈注釈箇所にも引用されているが, そこでの読みは gdul bar bya ba である (GAS, D 240b3-4, P 261a2)。
- (86) この VyY 5.2.11 「水の喩え」箇所の (2) (3) (4) は VyY 5.2.13 「安全な岸辺」箇所の (1) (2) (3) とほぼ同一表現である。
- (87) VyYT| sangs rgyas kyi gsung la dad pa bskyed pas. 直訳すれば「佛説に対する信を生じさせることによって」。注(84)に記したように, ここでは『釈軌論』本論に即して「同様に, 佛説〔という水も〕, (1) 信を生じさせることによって」と訳した。
- (88) 当該箇所は『頌義集』(GAS, D 240a7-b2, P 260b5-7; SKILLING 2000: 325, n. 73), および『ブトン佛教史』(*Bu ston chos 'byung* 5.4-9; OBERMILLER 1932: 11; 上野 2018: 138) に引用されている。
- (89) 当該箇所は『頌義集』(GAS, D 240b5-7, P 261a3-7; SKILLING 2000: 325, n. 74), および『ブトン佛教史』(*Bu ston chos 'byung* 5.10-19; OBERMILLER 1932: 11; 上野 2018: 139) に引用されている。
- (90) 'jug ngogs, Negi s.v.: tīra, kūla, taṭa, pratīra, pulina, tūrtha, srota.
- (91) dga' ba' rtse mo nyams su myong ba: OBERMILLER 1931: 11, n. 74 はカーリダーサ作『メーガドゥータ』「プールヴァメーガ」第 33 頌にある toyakṛḍāṇiratayuvati という平行表現を挙げている。
- (92) 当該箇所は『頌義集』に引用されている (GAS, D 240b7-241a4, P 261a7-261b3; SKILLING 2000: 325, n. 75)。
- (93) sgrib pa dang | sngon gyi sgrib pas 「蓋と, 以前の障害によって」: 「蓋」と訳した前者の語は sgrib pa であり, 五蓋を指すと思われる。他方, 後者では sngon gyi sgrib pa とある。徳慧は sngon gyi las kyi sgrib pa と注釈している。とすれば, karmāvaraṇa (業障) という語が想起されるので, ここでの sgrib pa の原語は āvaraṇa である可能性が高い。
- (94) de lta bas na: GAS には 'di la (ここにおいては) とあり, その方が適切と思われるが, 『釈軌論』のテキストを訂正するには及ばない (atra と atas の混同か?)。
- (95) 当該箇所は『頌義集』(GAS, D 241b7-242a1, P 262b1-3), および『ブトン佛教史』(*Bu ston chos 'byung* 4.18-20; OBERMILLER 1931: 10; 上野 2018: 136) に引用されている。
- (96) VyY snying por byed pa; GAS brtan par byed. ここでは GAS に基づき「堅固にし」と訳した。
- (97) blun po, Negi s.v.: mūrkhā, mūḍha, vimūḍha, jaḍa, etc. あるいは「聾啞者」の意味か。
- (98) bla'i| VyY(D); sla'i VyY(P). この bla'i | ... ma yin no || は, サンスクリットの varam ...

na tu の構文に対応するので、VyY(D)を採用する。たとえば、LAS 146.12, LAS(Tib), D 113b1 (bla'i |), P 125a5 (bla yi).

- (99) SKILLING 2000: 325, n. 76 は、当該箇所も『頌義集』に引用されていると注記しているが、誤記である。

- (100) 以下の詩節をうまく理解することができなかった。

'ga' la 'khrul ba bsal¹ nas² bdag nyid ni ||
dag 'gyur 'di yin shes nas 'dod pa'ang srid ||
¹bsal VyYṬ (P) : btsal VyYṬ (D) : byung VyY(DP)
²nas VyYṬ (DP) : na VyY(DP)

- (101) 出典不詳。徳慧注によれば、当該詩は大徳マートリチェータ（摩呬里制吒）作である。ただし、『四百讃』（*Catuhśatakastotra/Vaṇṇārḥavarṇastotra*）、『百五十讃』（*Śatapañcāśakti/Prasādapratibhodbhava*）を探索するも、平行例を見いだすことができなかった。
- (102) 徳慧注によれば、当該詩のみが世親作である。
- (103) 「善趣に生まれること」を意味する繁栄（abhyudaya, 生天）としばしば共に言及される観念であり、至福（niḥśreya）は「聖道に入ること」を意味する。
- (104) §5.2 の中では本節のみ「それゆえ、～敬意をもって佛説を聴くべきである」という類の締結文が見当たらない。
- (105) bdag nyid kyi(kyi) P; kyis D) snyan ngag | **yon tan de gsum** zhes bya ba rgya cher 'byung ba bcus thub pa'i dbang po'i gsung gi ched du gsungs pa yin no ||: 下線の bcus が理解しにくいため、ここでは削除して読んだ。この bcus は、マートリチェータ作詩を2つ、世親作詩を1つとみなせば、合計で10詩脚になる、という意味か。ただし、このアイデアは本論チベット訳からは支持されない。そこではマートリチェータ作詩が6詩脚（1.5詩）しかなく、世親作詩（0.5詩）を合わせてもチベット訳にして8詩脚しかないからである。あくまで原典におけるマートリチェータ作詩を2つとみなせば、という仮定に基づく。
- (106) tshig su bcad pa. 徳慧はおそらく詩（*kāvya）の詩脚を「偈」（gāthā）と呼んでいるものと推測される。
- (107) ldog pa. マートリチェータ作詩の（1）における log par のパラフレーズと推測される。

本研究はJSPS 科研費 JP17K02224 の助成を受けたものである。

【謝辞】前稿（上野・堀内 2018）および本稿にて『釈軌論』を翻訳するにあたり、本庄良文先生（佛教大学）より、詳細かつ多大なるご教示をいただいた。その学恩に衷心より感謝申し上げる。